

第一回 獄卒SS企画

主催.. ルフ

鏡があつた。紫色の布で覆われていた姿見の鏡は埃っぽい室内とは対照的に綺麗に光を反射している。その光源は僕の持っている懐中電灯だ。

「先輩、やっぱり何の変哲もない鏡ですよ」

僕は鏡に背を向け、入口近くを陣取っている女性に話しかけたが、彼女は鼻で笑っただけだった。

どうしてこんな事になっているのだろうか。音楽準備室の一番奥にある鏡が噂の学校七不思議の内の一つらしいが、わざわざ日曜の真昼に学校に忍び込んで鏡を音楽室に移動させて、暗幕を閉じて怪しげな儀式をする価値があるのだろうか。いや、そもそも僕には関係の無い話だった。

「いつまで被害者ぶってるつもり？ ちゃんと約束しただろうに。貴方が想いを馳せている女の子との仲を私が取り持ってあげるから、私の新聞作りに手伝って欲しい。ただ、それだけじゃないか」

「文面だけだと、ただそれだけですけどね。『君、あの子の事好きなんですよ？』といきなり話しかけられては、断ったら意中のあの子にあらぬ事を伝えにいくと言われたんですよ。これは立派な脅迫です」

家を出る時から大変だった。両親に何処かに出掛けると言うのだからまず制服では怪しまれるし、さらに学校に潜入する際には私服を教師陣に咎められぬ様に慎重に期す必要があつた。さらには音楽準備室の奥に辿り着くまでに邪魔な物を移動させたりと重労働。薄いグレーのシャツはさらに灰色となり、空気が

淀んでいるせいで喉が埃っぽく大層気分が悪い。

「それでも頷いたのだから仕事はきっちりして欲しいものだ」

「今さら七不思議なんて都市伝説以下のゴシップに興味を持つ人間なんていると思いますか？」

勿論、貴方以外で。嫌味を存分に醸し出しながら彼女に訊ねる。しかし、彼女はこちらがあっけらかんとするぐらいに簡単に認めた。

「そりやいないだろうね。だって、精神的に発達した高校生になってまで七不思議を追うだなんて馬鹿みたいだ。でもね、気になってしまったものは仕方ないさ。どれ、君にも興味を持ってもらおう。……そうだな、なんで七不思議なんてあるんだろうね？」

「そんな事を急に聞かれてもわかりませんよ。まず本当に七つもあるのかどうかも疑わしい」
懐中電灯を学習机の上に置き、机とセットの椅子に座った。しかし、彼女はそちらから訊ねてきたというのにこちらの言葉に中々反応しないのでいらいらが募る。彼女はゆっくりとピアノの椅子に座り、こちらに向かって足を組みかえてようやく話し始めた。

「君の着眼点はそこそこ良い方だ、25点かな」赤点かよ。

「まず七不思議と謳っているが、こちらの情報網を駆使しても七つはなかった。昔から変わらずに伝わっているのはこの鏡と、トイレで泣くような声がするというつまらない話だけだ」

人使いの荒い粗暴な彼女だが、容貌だけ見れば美人の部類に入る。それ故に、ついつい短いスカートから覗かせる瑞々しい太ももが気になってしまう。

彼女はこちらの目線に気づいているが、特に気にした様子もなく滔々と語る。

「学校の怖い話というものは基本的に七不思議として括られるが、実際は七つも無い。小さい噂程度ならあるのかもしれないが、高校生になってまでその噂を会報に載せたりはしないだろう。——だからこそ、私はこの鏡の信憑性を疑っているんだ」

「……どういう事ですか？」

考えを巡らせても全く意図が掴めない。そんな僕の様子に彼女は嘆息して、足を地面につけた。魅惑の太ももタイムは終わったようだ、残念。

「答えばかりを求める生活を送り続けていけば、君のように思考力が鈍るのだろうね。……まあ、いや。面倒だから簡潔に言う。根強くこの噂が残っているのであれば、必ず伝承通りの現象が周期的に発生しているのではないか」

「つまり、未だにわーわーぎゃーぎゃー言われているから、その所以がどこかにあるのではないかという事ですか」

「物凄く噛み砕いた言葉だが、まあ概ね合っているのだから文句は言えないね。で、件の鏡はどのようなものかは事前に説明しているだろ？」

その言葉に僕は渋々と頷いた。無駄な説明をさせてヤル気を失わせる事も出来るが、それ以上に彼女からのストレスが酷そうだから断念。

曰く、暗い部屋でこの鏡を見た者は、その者の未来が見えるという。暗ければいいようで、それは夜でも暗幕の閉じた昼下がりでも発現する。しかし、その未来というのはとても不吉なもので、やけに生々しい未来を見せてくれるらしい。だからこそ、こうして音楽準備室の奥に幽閉されては物好きが引っぱり出

してまた恐怖して封印する。その繰り返してこの話は生まれたようだ。

「しかし、さつきから全く変わり映え無しなんですけど、どういう事です？」

「そりゃ、私がずっと後ろで眺めていたからだろう。こういう不思議は一人で体験するものだ。一人だけでいるという事は、その場で起きた現象は全て自分の主観でしか物事を捉えられない。物事を常識と照らし合わせて条理を立てるには、他の観測者が必要となる。例えとして何か小さな物音が聞こえたって他の人がそれを否定すれば、それは自分だけでは証明できない。あらゆる観測を駆使しない限りね」

長々と彼女は語るが、言いたい事は理解できた。

「だったらとつとと部屋から出てください。この部屋で僕一人がこの鏡を眺めてればいいんでしょう」

「ほう、さすがにその程度は理解できるか。失敬、失敬。無駄に説明してしまう所だったよ。でもこれには訳があつてだな——」

「その訳とは、まず二人では見れない事だけを確認してから一人で実験をさせる。何も出なければそれまで、何か変化があればその変化の要因は必ず一人でなければならぬ。その証明がしたいだけでしょ。この埃まみれの脳みそでも理解できたので時間を無駄にしない為にとつとと部屋から出ていってください」

君はよく脅迫している先輩に向かってずばずばと物言う事が出来るね。どこか楽しんでいるかのようにはげながら彼女は外から扉を閉めた。

辺りに静寂が支配する。防音壁に囲まれた室内では全ての音が吸い込まれそうな錯覚を覚える。それは密閉した室内での息苦しきによる心臓の鼓動すらも、どこか遠くに行ってしまうかのようだ。

改めて鏡に懐中電灯を向ける。鏡に映っているのは無表情を装うとする自分の姿だけだ。それだけのはずなのに、何故だろうかこちらを見定めているかのような居心地の悪さを感じていた。

背中に汗がどっと噴き出し、熱を急に失って寒さすら感じ始める。人は怖い体験をして肝を冷やすと言うが本当だったのか。そうやって別の事を思考する事で何かから逃げようとした。しかし、

——目の前の現象を認識したのなら君だけでは逃れられないさ。

その一節が脳裏によぎった瞬間、視界が急激に揺らめいた。それでも視線は鏡から外せない。

鏡は緑色の光を放っていた。そして未来が見えた。



二人の女性がいた。近くに好きな女の子、そして遠くにはあの憎き女性。勿論、今回の騒動を起こしたあの新聞部だ。

鏡に映った僕は好きな女の子と色んな所をデートする。登下校を一緒にしたり、買い物に付き合ったりするぐらいの簡単なお付き合い。それでもお互いに笑い合っている素敵なお光景だ。——それなのに、僕は映った僕の顔の裏を理解してしまっていた。あの笑顔の裏に隠れているのはつまらなさだった。

平凡な会話をして、未来へ向かって歩く日々。普通ときめくはずの触れ合いすらもどこか物足りなさを感じている。物足りなさを感じる原因は遠くからこちらを俯瞰しているあの先輩だ。あの先輩との会話は、暴力的で僕の尊厳を水底へと突き落とすかのように酷い事を平然と行われる。そして雨の日に泥まみれにな

ったり、何故か田植えを手伝わされたり。将来起こりえるその光景が見ている今の自分に突き刺さる。未来は加速する。僕は女の子と結婚していた。周りには祝福してくれる両親や友人、職場の同僚がいた。でも、それでも、僕はつまらなさを変わらず笑顔で塞いでいた。

「未来というのは過去を基にして現在の選択によって生まれるビジョンである」

幸せで満ちているはずの空間の外側から声が響く。その声が先輩だと気付いた瞬間に、周囲は暗闇に包まれる。何にも無い空間に僕と先輩は立っていた。

「つまり、未来を生むのは結局のところ過去である。その過去で悔いてしまった事を残せば、それは現在を通して全て歪んでしまう。だからこそ私は後悔しないように周りを振り回す。そうやって振り回す方法を考える事が私の楽しみである」

「自分だけが幸せになればいいと言っているのか？ それではこの現代社会において生き残る事は出来ない。確かに悔いの無いように過去を充実させたのであれば、現在に自信を持って生きる事が出来るだろう。でも、それは孤独なんだ。だから人は媚びて、どこかで妥協して生きるんだ」

自分でも何を言いたいのだろうか。彼女の言う事を反射的に否定してしまいたい。その衝動に駆られては、偉そうで空虚な言葉を連ねてしまう。だからこそ、彼女は堂々とそこに言葉の刃を突き立てる。

「媚びて妥協した結果が君のあの笑顔さ。遠くから見ればハッピーエンドだが、近くで見ればノーマルエンド。君自身がノーマルエンドと感じてしまっている限り、その主観が揺らぐ事はない。揺るがないが故

にバッドエンドでもあると言い換えられるね」

「だったら何をすればいいんだよ！　どうやってやればさ、先輩から見ても僕から見てもハッピーエンドに見える!？」

激昂した。ここは夢の中なのだと言いつつ割り切つて言いたい事をぶちまけた。どうせ具合が悪くなって倒れてこんなへんてこな夢を見ているに違いない。

しかし、彼女はそんな自分に対して優しげな笑顔を浮かべて辛辣な言葉をぶつけた。

「それを考えるのが君なのさ。私の主観なんて気にする必要はない。何が必要で、その為に何を成し遂げればいいのか。人は道に迷える羊であるとともに、自由という武器に戸惑う生き物だ」

「またいつものように難解な言葉を連ねては僕を馬鹿にするんだらうね」

自分に自信が無くなった僕を見て彼女はいつも通り意地の悪い笑顔を浮かべた。

「わかっているじゃないか。そうやってわかる事で、経験を過去にして、その過去で自分を確かな存在にする。外の世界は主観一つだけでは揺らぐだろうが、その主観が元々揺らいでいては生きていけないのさ」

僕はその言葉に何故か安堵してしまっていた。瞼が少しずつ閉じてこの幻想を終える。

「おやすみ、そしておはよう」

意識の底に沈んだ時、二方向から声が聞こえた様な気がした。



目を覚ますと、そこは燦々と太陽の光が降り注ぐ音楽室だった。暗幕は開かれ、あの鏡は見当たらなかった。

しかし、いつの間に横になっていたのだろうか。先程、何か変な夢を見たような気がするのだがうまく思い出せない。そして何故だろう、倒れているはずなのに頭が優しく包まれている。

ふと見上げる。先輩がこちらを見ていた。

「どうだい、好きな彼女がいるのにこうやって膝枕をしてあげている私の寛容さは」

「……とても身に沁みます」

ゆっくりと起き上がって先輩に色々と言った。しかし、わかった事は先輩が数分経たない内に気になつて扉を開けたら僕が倒れていて、いつのまにか鏡に布がかけられた状態であつた事ぐらいだ。僕の質問に答えた先輩は雪崩のように質問を僕に浴びせた。が、うまく答える事はできなかつた。

「で、何があつたかは話す気はないと君はそう仰られる？」

「まだ頭がぼんやりとしているせいで、うまく言葉にできないんですよ」

自分でも馬鹿な事を言っていると思つたが、先輩は意外にもあっさりと身を引いた。

「まあいいさ。君のあられも無い姿を写真に収めたから、十分な収穫さ。あ、データは既に自宅のパソコンに送付済みだから、これからも存分に働いてくれ」

不意打ちの爆弾投下が為された。

「おい、あられも無い姿ってなんだ」

見事なクラウチングスタートで逃げる先輩は一瞬足を止め、楽しげに僕に言った。

「だったら現在を知っていけ。何だったら私の過去でも調べて弱みを握るのもいい。まあその時には臍の右下に黒子がある事を、大仰でそれでいてこっそりと学校中に広げてあげよう」

「どこまで見たんだよ!？」

慌てて追いかけようとするが、先輩の姿は見当たらない。

つまらないはずの日曜の昼が特別な過去になっている事を僕はこの時知らなかったのだ。

これは昨日の話である

青井 一人

僕はいつものようにコンビニで買物をしていた。品物を手に取り、レジに向かう。

女性店員「2点で328円になります。」

品物を受け取り支払いを済ませる

女性店員「72円のお返しになります、ありがとうございました。」

約30秒ほどのやりとりが終わり店を出る。その間僕は嬉しさと悲しさが混ざったような少し懐かしい感覚に陥る。よくある話である、僕はこのコンビニの女性店員に好意を持っている。だがしかし常日頃、四六時中この女性店員の事で頭がいっぱいになるほどの好意ではなく、気になる存在、もしくはこの女性を見ると前述した懐かしい感覚がよみがえる事に興味があるのかもしれない。



これはまだ僕が学生服を着ていた頃の話だ。学年が一つ上がりクラスメートの顔ぶれも変わる、新しい席で担任を待っていた。幸運なのか不運なのか右隣には以前から気になっていた女の子が座っていて仲の良い女子生徒と談笑していた。僕は友達がいなかったわけではないが、その時は特にやることもなく机に

伏せて寝る姿勢をとっていた。やはり気になる娘は気になる、自然と耳に入ってくる声、何の話をしてい
るのだろうか？もしかしたら自分の事を話しているのかもしれない。などと都合のいい妄想をしつつぼや
けた二人の会話に耳を凝らした。耳から入り、脳みそを通り、心臓を揺さぶる。彼女たちは自身の初体験
の話をしていたのだ。今でこそこの程度で動揺することはないが、思春期まっさかりの純朴な少年にとつ
ては心臓にナイフを突き刺されそのまま窓から落とされるような精神的ダメージを受けた。そのやり場の
ない衝動はゴミ箱へ、はたまたトイレに流れていった。

◆ ◆ ◆
話はコンビニに戻る。僕が何故女性店員に対し懐かしい感覚に陥るのか、その答えは彼女は学生である
こと。僕が彼女に抱く好意は単純に容姿や雰囲気が入ったもので。悲しさについては彼女が「学生時
代」という今の自分には入り込むことのできない遠い世界にいること、さらに僕の「学生時代」での「あ
の思い出」によるものだろう。すでに彼女には好きな人や寄り添う相手がいて楽しい学生生活を送ってい
るのだらうなどと考えると今でも胸の傷が痛むが、あきらめの早い僕は「自分には関係のないこと」と冷
静を装い今日もコンビニに行くのである。

その日は友人と某所で待ち合わせをしていた。普段より早めに起き支度をして出発する。電車を乗り換え目的地を目指す。集合時間より少し前に到着し、駅前の落ち着ける場所で友人の到着を待っていた。渋谷、原宿などと比べれば可愛いものだが駅前にはたくさんの人々が行き交っていた。それぞれが目的地を目指して歩いて行く。不規則に時に信号に操られ流れていく様子をまるで天界から下界を見下ろす何様になったような気分で眺めていた。

学生、サラリーマン、年寄り、子供、まさに社会の縮図だった。これだけ人がいればいつか自分と関わりを持つ人もいたりするのでは無いか？などと子供じみたことを考えたりと、人間観察に味をしめた僕はこれまた目を惹かれる女性を発見した。瞬時に思った「あの人とお近づきになりたい」と。もちろん無理とわかっていても脳内での言論、想像、空想、は自由であるため安易にそのようなことが言える。



分かりきったことだが街ですれ違う他人など大概は二度と会うことなど無く、言わば一期一会である。では、この女性と今後関わりを持つためにはどうすればよいか考えた。選択肢は一つ「声をかける」これしかないのである。声を掛ければ何かしらの可能性が生まれる。もちろん煙たがられ、無視される可能性もある。むしろ高確率で敗北するだろう。しかし、そうでない可能性ももちろん有る、それを確かめるには「声をかける」しかない。その行動一つで何らかの可能性が広がり選択肢が増え新しい道が開けるかもしれない。

しかし僕にはそんな度胸は無く女性は街に消えていった。二度と会うことは無いだろう。この例に限らず、普段の生活の中でも、ここぞという時に何か行動を起こせば数分先、数年先、良くも悪くも何らかの結果が出て自分の未来に影響するということ。どうしようもないくらいに誰もが分かりきった、正論とも呼べない持論を展開したが、何もない日々より何か行動をしていくらか動きのある日々を過ごせたほうがマシだよなって思ったけどなんかお腹すいたしカレー食べたいの夕暮れ時、待ち合わせ時刻より2時間少々、友人は到着した。

僕は考えるのをやめた。

君の上手な諦め方

1mm

りとくん。

どうしたの？

なあにー？ わあ、すごい、きれいねっ。

ふわふわ。かわいいー。

りとくんも、ピンクいろすきななの？

なぎもね、ピンクいろだいすきっ。おかあさんが、ピンクいろすきだから、なぎもいつつもピンクいろなの。ひらひらだともっとかわいいから、なぎ、いつつもひらひらピンクいろさんっ。

……ほんと？ ありがとう、

りとくん、はいっ、おててつないでかえろー。
ピンクいろさん、ばいばい。また、りとくんと、あいにくるねーっ。

*

りとくん。

どうしたの？

……わあ、きれいっ。すごいねーっ。

そっかー、このまえ、んっど、きよ……ねん？ きよ年？ りとくんが見てたお花さん？
すごーいーっ。

ずっとさくのかな？

……そうなの。じゃあ、ずっと見にきたいね。りとくんといっしょに見るっ。

なぎね、ピンク好きなの。

しってた？ そっかー。うん。かわいいから好きなのー。

おようふくだけじゃなくてね、なんでも好き。

りとくん、いっしょにおうちかえろ。はいっ。

ピンクお花さん、またねっ。

*

りとくん。

わあ、きれいーっ、

ピンクお花さんのきせつかあ。きれいだね。

おつきくなったら、お花さんさわられるかな？

……りどくんはさわられるよ。なぎもね、がんばって大きくなるもん。
お花さんまってるね。

……え？ ちぎらないよ。よしよしするんだよ。ちぎったらね、お花さんはいたいんだって。お母さんが言ってた。きれいでも、お花さんかってにちぎっちゃだめなのよ。

りどくん、かえろうー。はいっ。

お花さん、またね。

*

りどくん。

わあ、きれい、

りとくん、咲くの見つけるの早いなあ。すごいね。
お花さん、こんにちはっ。

毎年きれいに咲くね。だいにされてるんだね。

……？

なぎじゃなくて、お花さんよしよししてあげてっ。
きれいにさいて、がんばってるの。

りとくん、かえろーっ。

お花さんまたね。

*

梨斗くん。

もー、ずっと置いてくーっ。いっしょに連れてってくれればいいのに。
お花さん、こんにちはー。

梨斗くん、もうちよつとでお花さんに届きそう？ なぎも、もうちよつと。
どつちが早いかな？

……えー、何で？ なぎも背伸びるもん。

……うー。

梨斗くん、かえろー。
お花さん、またねー。

*

梨斗。

もう、一緒に連れてって言うのに、いつも一人で行くー……。
お花さん、こんにちは。

梨斗、なぎと一緒に、嫌なの？

えー、だって最近ずっとだもん。

皆がいろいろ言ってるの、気にしてる？　なぎのこと。……違うの？　梨斗のこと？

どう言われても、なぎ、気にしないのに。梨斗のことも。なぎのことも。

梨斗は梨斗なの。なぎはなぎなの。

皆とおんなじじゃなきや変なんて、それが変なのよね。

……なぎは梨斗が好きなんだもん、梨斗と一緒にいるのがいいんだもん。

……？

梨斗、一緒、帰ろ？

お花さん、またね、来年は梨斗と一緒に来るからっ。

*

りーとーっ、

梨斗の馬鹿っ。そんなに私と一緒に嫌なの!?

お花さんが楽しみなのは分かるけど、うー、毎年、一緒に行こって言うのに……。

……いいもん、一人で帰る。
何で？

よく分かんない。……梨斗の馬鹿。

*

梨斗。

やっぱり。そろそろ咲くかなって思って来てみたの。梨斗、毎年すごいね。
お花さんこんにちは。

うー、まだ、届かないな。もうちよつとなんだけど。
梨斗は、……だよ。ずるい。

……ここでそのよしよしは、喧嘩売ってるのです？　はん？

ええ、何それ意味分かんない。梨斗こわい。

小さい子さらっっちゃ駄目だよ。しない？　うん、駄目だよ。

久し振りに、一緒に帰ろ？

何か恥ずかしいね。懐かしいな。恥ずかしいってか、嬉しい。かな？
お花さん、またね。

……？　梨斗、早く。帰ろーっ。

*

梨斗。

おかえり。ふふー、さすがにもう、私の方が早いね。

ええ、駄目なの？ いいじゃん私もこの花好きだもん早く見たいもん。
駄目なの？ ええー……。。

じゃあ、来年は、梨斗が迎えに来てくれるからにする……。

梨斗。はいっ。早く行こ。
お花さんまたね。

*

梨斗さん貴様喧嘩売ってんですかああん？
迎え来てよおおお待ちしてたのに、馬鹿ーっ！

一人で来るとかもう、……はあ、いつものことだけどね、そうだね。

何。ほだされると思ってたんの。

……にや、

……梨斗の馬鹿。

*

(ちやんと、一緒にね。一緒のものを見ているって、思っていたんだよ。)

なぎちゃん。 椰。

(目線が変わってしまった可能性は、敢えて、見ない振りをして。)

*

「梨斗」

今までのことを思い出したら、いつも、椰の第一声は、自分の名前だった。ふんわりとした淡い色のワンピース。それに似合う、ふわふわした声で。

「りーとっ」

そして今年も、毎年の如く。

呼ばれて、ゆっくりと振り向いた。

……そしたら、すぐ目の前に椰の顔があった。

思いつきり仰け反ってしまった。先程まで穏やかな気持ちでいただけに、心拍数の跳ね上がりが物凄かった。めちやくちや心臓に悪い。

椰はそんな自分の反応に笑っている。笑い事じゃないです、椰さん。まったりさせてよ。

「どうしたの」

「うん、ちよっと驚かせてみようかなって」

「……止めてよ」

思惑通りに行つて、嬉しそうに笑う。椰が嬉しそうなのはいいことだけど、自分が穏やかでないのはあまり宜しくない。お互いまったりとしあわせな喜びがいいです。

「平和に生きましようよ、椰さん」

「たまにはいいかなあと思って」

「……」

どうやら、共通認識ではなかったらしい。

「……」。

で、本来の目的は。お花さんじゃないの？」

三月。いつも決まった時期に、綺麗に咲く花。

小さな公園の隅に一本だけで咲いている、この桃の樹がとても綺麗で。幼い頃に見つけて以来、毎年欠かさず見に来ている。

ひらひら、満開の桃花。

揺れる淡い色を、花と同じくらいひらひらふわふわした幼馴染と、毎年一緒に見上げて。

(一緒のものを見ているって、思っていた。同じ視線で。)

椰。

「うん。あのね、」

椰が、そっと笑って。数歩、自分から身を離す。

それでようやく、椰の全身が目に入った。

……絶句。

「見てもらおうと思って。梨斗に」

……どうでしょう。似合う？

恥ずかしそうな声音でそう問うてきたけど、その表情は全然恥ずかしそうじゃなかった。

ずっと。

椰が好きなのは、ふんわりでひらひらで淡い色、特にピンク色の、かわいいとしか言い様がない、ワンピースだった。

そんなかわいいワンピースが似合うように、髪もいつもふんわりさせて。手先足先まで、きっちりかわいくして。

つまり、椰は、とってもかわいい子だった。
なのに。

「……えっ。どういう、こと？」

「いや、さすがにね、」

もう、ヤバいかなあと思って。

そこだけ、ぽそつと呟くように吐き出して。

「やっぱ女の子してるの好きだし、楽しいんだけどさ。

梨斗、めっちゃかわいくなってるんだもん。男物着ててもね、やっぱかわいいんだもん。

さすがに、焦ってきてたわけですよ。男として隣にいなきゃ、そろそろもう本当ヤバいかなーって思っ
ちやって」

うん、だから、もうね。 椰さん、我慢出来なくなっちゃった。ごめん。

かわいいかわいい女の子の椰じゃなくて。

そこに立っていたのは、どこからどう見てもかっこいい、男の子になってしまった椰だった。

顔は、取り敢えず椰だった。

敢えて見ない振りをしてきた姿の、 椰だった。

「えっ。」

「……ごめん、意味分かんない」

「あれ。分かんない？」

「いや、ごめん。分かるけど、分かりたくない」

「あら」

「椰ちゃん？」

「椰くんだよ。椰ちゃんは、もう、過去にしてあげて？ 駄目？」

「だめ。椰ちゃんが好きだよ。椰くんは、こわいから、いらない」

うー、いや、そんな気はしてたけど。やっぱ、そっか。

椰が笑う。椰だった。

椰だけど、もう女の子じゃない、椰だった。

「りと」

「やだ。 椰ちゃんが椰ちゃんじゃやないなら、 椰が呼ぶ梨斗はいない。」

「梨斗。」

「……なぎちや、」

梨斗。

やんわりと、笑って。

そして椰は、自分が一番目を逸らしていた言葉を吐く。

「梨斗、すき。」

だから、もうお母さんとの約束は、全部おしまい。
ね？

椰が、桃の花を一房手折った。

痛がる桃花を、自分に差し出して。

「ずーっと。縛り付けて、ごめんね。」

お母さんに縛られるのは自分だけでよかったのに、梨斗と一緒に縛られてくれてたから。勘違いして」

甘えて、自分まで梨斗を縛ってたことに気付かなくて。

「違う。自分が、椰ちゃんを好きただけだもん」

「梨斗」

窘めるような声音、でもそれはすぐ、ふむん、と変な音に変わって。

「……梨斗、今の、ちゃん付け無しで言ってる？」

「椰！」

うにゃああああ、と汲み取り不能の声漏れる。

こうなると分かっていたから、ずっと気付かない振りをしてきたのに！

知っていた。同じ視線だと思っていたのに、いつの間にか、椰の視線の軸が自分になっていたこと。

そして、椰が男の子になって自分が女の子になってたら、椰はきっと女の子梨斗さんを、自分が椰ちゃ

んにしてきた分甘やかしてかわいがるつもりなのだということ。

ついでに、狼さん力も同時に存分に発揮するつもりなのだということ。

「こわい。 椰くんこわい」

「こわくないよ。 梨斗、だーいじにするから」

甘やかしも含めて全部、こわいというのに。

おいでおいで、と椰が笑う。

溜め息を落として、一応、考えて。

……諦めた。

「てかね。お母さんとの約束はおしまいって言ったけど。

解決案というか代案ちゃんがあるから、大丈夫なんだよ。梨斗、気にしてるでしょ」

「？」

ずっと笑顔だった榎だけど、この笑顔で、ああ男の子になったなあ、と遂に認めてしまった。

「榎ちゃんは反抗期を迎えて『かわいいむすめ』じゃなくなっちゃったけど、これからは、梨斗が『かわいいむすめ』になること。」

娘でも義娘でも、問題ないよね。

「……わー、」

諦めてよかったのか、ちよつとだけ迷った。

*

偽りの性別にさよなら。

（今後の知り合いに過去話は出来ないね。）

*

3910文字。

補足…年長↓小一↓小三↓小五↓中一↓中二↓中三↓高一↓高三↓大一↓今（大二・二十歳）

咲かざる椿、燃ゆる雪。

1mm

赤い椿が咲いていた。真白い雪の中に、一輪だけ。

*

「咲かざる椿、燃ゆる雪。」

*

たとえば。

例えば、俺は、お前に初めて会った時に交わした言葉さえ覚えてる。

例えば、俺は、お前が気付いていないようなお前を知っているし、お前が忘れてしまったようなお前も覚えてる。

そして、例えば、この想いだ。（褪せることなど、決して、）

幾らでも挙げられる。俺の中での、お前の位置付けを示す証拠など。きつとキリがない。

例えば、お前の為ならば、自分の身を挺すことを犠牲だとは思わないのだ。

幾らでも、俺は。

*

「『さよなら』って、素敵な言葉だと思わない？ 逝く時の、別れにちょうどいい言葉だ」

主はいつもそう言った。口癖と呼べるそれは、死を拒まない、という態度の顕著な表れだった。世界をどうでもいいと思いながらも、しかし毅然と生きる主の、それが、数少なく表される情趣の言葉だった。

「だから、私は君と離別する時には『さよなら』と言うよ。大丈夫、虚無感なんてものは、たった数瞬の幻だから」

そう言って宥めるように口元を緩ませるのが、上辺でしか笑わない主の一番優しい笑みだった。そうして、

そうして、主はいつも俺の目を覗き込んで、言った。普段振りまきっぱなしの愛想からは想像もつかないような真剣な目で、言い聞かせるようにゆつくりと。

「そうならば、君はようやく、私から解放される」
自由に、なれるんだ。

まるで、それが、俺の望みであるかのように。

*

『けいか』というのが、当時幼かった主が自分に付けた名前だった。『炯伽』。今となっては、呼ばれ

ることは殆ど無い、名前。主は大抵、俺のことを『君』と呼ぶからだ。

主が独り立ちをしたその日から、主の『僕』は『私』になり、『けいか』は『君』になり、その改めに感化されて俺の『お前』は『主』になり。

つまり、その日を境に、主も俺も、主従という関係の見方捉え方が急激に変わった。

「君は、私を見てくれるんだね。」

笑みをかたどって言われたその言葉は、俄かに、泣きたいような気持ちを浮き上がらせた。確かに、主をちゃんと見ていたのは俺だけで、逆に俺をちゃんと見てくれていたのも主だけだった。要らない子と、要らない子。共に家を離れることに反対される訳も無かった。

そんな境遇があるからこそ、依存し合いながら共立しているのだ……と。ずっとそう思ってきた。少なくとも俺は、互いにそう思っていると、そう認め合っていると。互いの互いへの感情は同じなのだ、ずっと。

だから、初めてそれを言われた時、言われたことの意味が全く理解できなかつた。主が何を言っているのか分からなかつた。それが、紛れもなく自分に向けられた言葉なのだと、どういう意味であるのかということ。時間をかけて考えて、考えて考えて……それらを理解した瞬間、穏やかだつた世界は、確かに、大きく揺らいだ。

つまり、主は、俺にとって自分が枷になっている……と、そう思っているということだ。負い目を感じているということだ。

——愕然と、した。それは、傍目にも明らかな擦れ違いだった。心の有り様は同じなのだ、ずっとそう思い続けてきた己を瞬間的に突き壊す、絶大な擦れ違いだった。

「なんで、と思った。思った瞬間には口に出ていた。」

「なんで」

「うん？」

「なんで、そんなことを言う？」

「……」

「……」

「……」

「……なんで。」

「……でも、そうだよ？」

「言葉の正当性を聞いてるんじゃない。分かっているだろう」

「分かっている、けどね。」

「……」

「……」

「……なんで、そんなことを言う。」

「……。。。」

「主、」

「……はぐらかすって決めてたから、言わないよ。
いくら君でも。君だからこそ、かな」

「……、」

「言わないよ」

「……。」

「言わない。だから、今後もそれは、聞かないように。」

得られた理由は、たったそれだけ。つまり、無いに等しかった。

なんで主がそんなことを言うのか。それは、主が俺には知られたくない何らかの理由があるから。何らかの理由……負い目を感じる理由は、明かされない。そして、明かされないままに、尋ねることさえ禁じられてしまった。

つまり、擦れ違いは擦れ違いのままだ、ということ。ほとんど一本に近いのだと思っていた平行線が、曲がってはつきりと二本に別れてしまった、ということだ。曲がる方向がそれぞれ異なってしまうえば、その先で再び交わることなど容易に望めるものでは無い。

……妥協するしか、なかった。

主が望むのだから、問い詰めはしない。だからといって、その言葉を受け入れられるわけでは決してない。仕方がない……仕方がないが反論は諦めて、ただし、せめてもの抵抗表示で聞き流す振りをする。聞き返

しはしない、代わり、聞き入れもしない。主の望みだから無視はしない、代わり、俺の意思も無視はさせない。同等の交換条件、それが最大限の妥協だった。

「私と離別したら、君は、自由だから」

何が？ 何が、自由なんだ。何を以てそれが「自由」だ、と。

主の言う「自由」が、分からなかった。そしてそれは今も分からないまま。

俺は、主と共に在れば、他に何も望みはしないのに。何を望もうともしないのに。俺を俺として扱ってくれる、ただひとりの人。主と共に在れば、それだけで。

主との離別が「自由」なのだと言うなら、そんな自由は必要無い。そんな自由など。

何故、主と離別しなければならぬ？ その前提は何処から来たのか。死の離別について考えるには、俺は勿論、主にしても早すぎる。ならば、主の言う「さよなら」は一体何を前にした「さよなら」なのか。考えて、考えて考えて、……しかしやはり思い付く事は何も無く。

主が「自由」を持ち出す度に浮かぶ疑問の山は、切り崩せる隙間さえ無いまま。

梅雨と冬が嫌いだ。それは、自分の体質ゆえの苦手意識から来るものだ。体温調節を怠って雨や雪の中を出歩くことは、下手すると命に関わってくる。しかし、だからといって、避けられるものでもなく。

「あ、」

「どうした」

「うん、降ってきちやった。ほら」

初雪。

声音に促されて、窓の外に視線を向ける。灰色の空から音も無く落ちてくる白い水。

「……最悪」

ゆっくりゆっくりと空気を染めゆく小さな結晶。大地の息吹を覆い、生命の熱を攫い、黙々と世界を侵していくもの。俺から、命を奪うもの。

「しばらく、外に出る時は要注意だな」

「そうだね。大丈夫、ぬくぬく身体休めて、基本的に引き籠もっていれば心配いらナイよ」

「引き……まあ、そうだけどな、」

「体質なんだから仕方ないよ、気落ちしないの」

そつと主が笑う。意識せず、口から大きな溜め息が出た。でも、確かに、仕方ない。冬の間の辛抱だ。空を見るとどうしても苦々しい目付きになってしまいが（それだけでなく目付き悪いのにね、と主に言われたことがある。自分でもそう思った）、天候など、それを司る者以外が勝手に変えていいものではないのだから。

と、溜め息混じりで考えていたのが今朝方のこと。そして今。

「……う、わ、これは、ひどいね」

「……。」

ちらほら具合だった雪は、止むどころかそのまましんと降り続いたらしい。現在、昼過ぎ。扉を開けた先、視界に入ってきたのは、全てを真っ白く覆い尽くされた世界だった。顔をしかめて、溜め息を一つ。

しかし、憂いたところで、外出しなければならぬことに変わりはないのだ。

「ごめんね、私が行ければいいんだけど」

「来客の予定ばかりはどうしようもない。平気だ、何か発作が起こるわけでもないしな」

仕方ない、と、ゆるゆる息を吸い直して。

「いつてくる」

「いつてらっしやい。ありがと。」

……ああ、

「どうした？」

「ううん。椿がね。今年はまだまだ咲かないの」

しゅん、と。

玄関先には、椿が植わっている。主が好きな赤い椿。家を出る時に一緒に連れてきた、主の大事な御守りだった。毎年、開花時期はばらばらな、不思議な椿だ。今年はどうやら遅咲きらしい。

「楽しみだね。咲いたら、いつも、嬉しいことが起こるから」

そわそわとする主に、小さく笑う。

「待ちぼうけだね。」

……ああ、ごめんね、寒い中引き止めて。

今度こそ、いつてらっしやい」

「はいはい」

他愛無い言葉をやんわりと交わして。

ようやく、外へと一步踏み出した。

白く白く、空気が変わった気がした。

雪が降る勢いは、もう大したものではない。

*

外出半ばで、忘れ物があることに気付いた。

反射的に舌打ち。

このまま済ませてもいい気はしたが、いずれ、雪の中を再度出かけ直さなければならぬ可能性が僅かでもある以上、億劫だが、一度出直しても今日のうちに全て済ませた方がマシだろう。

もう、雪は止んでいた。静かに、積もった白が踏み固められていく。

*

思った以上に、暗くなるのが早い。

まだ夕刻に差し掛かるくらいだと、そう急いではいなかった。だが、夕刻に差し掛かった、その後の空の移り変わりが恐ろしく早く。

(甘く見ていた。)

戻り先が近くなるごとに、早足が増していく。まさに、脇目も振らず、さっさと出直さなければと、そればかりを考えて。

家が見える所まで来ると、もう本当に周りなど見えていない。

白い白、濃藍を帯び始めた白。雪の色しか、どうせないのだと。

そんな中、辿り着いた扉の前。

はあ、と息を吐いた。溜め息なのか達成感なのか、よく分からない。

だが、用事はここで折り返しだ。早く済ませなければ、と、焦りと脱力が混じったような思考で。

視界の端に、小さな赤。

(……ああ、椿咲いたのか。後で主に、)

「だ、め。」

「え、」

けいか。

扉は、開ききらなかった。

あかい椿が咲いていた。真白い雪の中に、一輪だけ。

……花が最初に開くには、あまりにも不自然な、低い位置に。

視界に入った時は気にも留めなかったのに。今になって、こんなにも思い返すのは。

(ゆい。)

きつと、扉を開けたら、自分の過ちを笑ってくれるはずだと、信じていたから。

(『さよなら』は、言えなかったな、)

咲いていたのは君のあか。

*

カニ文字。

補足は無しで。

蝉が喚き始めた。

複雑な音色は本格的な夏が近づくにつれて激しさを増し、それは立派な騒音となってこの狭隘な六畳間に響く。

毎日突貫工事の石を砕く音が聞こえ、急に現代化が進み始めたこの街に住んでもう半年にもなる。街の偉い人は何を考えているのかいまいか、あちらこちらに首の長い工事車や土を抉る装甲車みたいな機械を配置し、発展だなんだと言って背の高い建物や道路の整備を行っていた。僕の住むアパートの横にも、近いうちにマンションが建つらしい。

そんな未来の無いアパートの、暗鬱としたこの狭い空間に死んだように四肢を投げ出して転がり、ひたすら天井の木目を睨んでいた。この部屋に越すと決め、半世紀生きた両親に立地が悪いと躁狂な声で難色を示されもしたが、今では立派な僕の家だ。

まだ昼前だというのに、蛍光灯を点けないこの空間は酷く濁っていた。軋んだ雨戸を半分まで閉め、少しでも日差しを浴びまいとする。日光は……何となく、苦手だ。

扇風機にはまだ命が入っていない。使い古された首が折れて下を向いている。基盤に手を伸ばそうとして、やめた。暑さを我慢できない訳でもない。非常に無意味に思えたのだ。

汗が汗腺からじわりじわりと滲み出ていく。ぬるいコーラを浴びたかのような不愉快な感覚に、しかし僕は起き上がろうとはしない。

目の端が痙攣を起こす。気怠さを覚え、開いていた目を閉じた。

真っ暗な空間。赤や緑が散って消えてを繰り返す、目の裏の世界。

思考なんてただの重りだ。

考えれば考えるだけ重力を増す。

なら、何も思わない方がいいのに。

寝返りを打ち、そっと目を開ける。思考の回路が砂の様に消えて混ざり、僕の部屋の一員となる。

そうやってこの部屋は散らかってきた。

いつだって、今だって。

【暗転】

赤い自転車のあの子。

ぼくはずっと見ていた。

毎日毎日。

いつも同じ道を通るものだからつい、

見蕩れていた。

【暗転】

目を覚ましてようやく起き上がった。体は重力に逆らわずこのまま寝転んでいたいと文句を言っていたが、黙殺して財布を手に取りおざなりに家を出た。

安っぽい家の鍵を手中で持て遊びつつ、発展途上の道を行く。よれたシャツにジーパン、サンダルという傍から見れば少し近寄りがたい風貌である。自転車のタイヤの空気を手動で入れる自転車屋の主人の横を通り、煙草の自動販売機の前で屯する高校生の集団を避けて通る。相変わらず地鳴りと共に工事の音はそこら中に響いていたが、耳が慣れてしまったのかそれはもうただの環境音と化していた。

二つ角を曲がったところにある、行きつけのコンビニエンスストア。安っぽい入店音と店員のいらっしやいませは環境音にかき消され、何も気にすることなく雑誌コーナーへ向かう。確か今週発売の少年誌が出ていたはずだ。

「唐揚げ買おー」

「太るよー」

「今日はテスト頑張ったから御褒美なの！」

若い女の子達の黄色い会話が聞こえる。雑誌を立ち読みしながら、しかし耳はそちらへ向いていて。

「テスト難しくなかったー？」 「やばい超金無い」 「バイトしてえー」 「チーズ味1つ」

少女達の話のベクトルがあちらこちらに交錯しており、土を削る機械の音よりも雑音に近い。

あの子も。

いや、あの子は。

雑音なんて発したこと、なかった。

あの子が最後に発した『音』は――

コンビニエンスストアで水と明日食べる菓子パンを購入し、白いビニール袋に入れて店を後にする。帰り道は先程とは違う道を行くことにした。

生垣を整える庭師を横目に見つつ、ゆるやかに下る道を遮る、黒と黄色の遮断機。

僕はその前に立つ。

別に遮断機が下りている訳でも、何かを待つ訳でもない。

熱気が鉄と混じり、陽炎が揺れる。線路の遥か向こうをきちんと認識できない程度に。

そして、遠くから徐々に近づいてくる、滑車が線路を滑る音と、踏切の警告音。どうやらもうすぐ電車が通るのである。

思わず一歩後ずさる。

あの時の情景が脳裏に焼き付いている。
もう、やめてくれ。

思い出したくも、ないのに。

電車と警告音が、僕の前の踏切までやってきた。

後の祭り。

僕はあの時から動けないままにいる。

【暗転】

雨の日だった。前日から降り続いた雨は少しも勢いを弱めることなく、この街を沈めていた。独特の濁った湿気の間。纏わりつく水分は、しかしどこか心を落ちつかせる。

僕は踏切の横にひっそりと生えた雑草の上に居た。あの頃も今と変わらず、非活動的な体。記憶は残っている。珍しく。本当に、稀なことなのだろう。

彼女が傘を差しながら自転車を転がし坂から下りてくる。いつもとなんら変わらない光景。違うと言え
ば、傘を差している事ぐらいであろう。

彼女は僕に気付いていない様で、少し慌てているのか顔が緊張している。

と、突如雨の音を掻き消して警告音が鳴り響いた。

鉄を殴りつけるかのような、激しくて耳の痛くなるような音。近付く者は許さないと云わんばかりの拒絶の音色。

遮断機が下り、だんだんと近づいてくるのは鉄がごうごうと動く音。

僕は彼女から目を逸らせずにいた。

彼女の白い手は、拙い握力で自転車のブレーキを握りしめている。

雨で濡れたブレーキのゴム部分が滑って、タイヤの回転を必死に止めようとする。

坂で勢い付いた速さは、最早留まるところを知らない。

加速し続け、

やがて、

彼女は拒絶の向こう側へいった。

【暗転】

赤色を今も覚えている。

彼女を救いたかった。

その直後降り注いだ彼女の断片により、僕も命を落としている。

珍しく思った。生前の記憶が残っているなんて。

電車が通り過ぎ、警告音は何かに斬られたかのようにすっぱりと聞こえなくなる。同時に遮断機がのろのろと上がり、何事も無かったかのように陽炎の景色が戻ってきた。

僕は踵を返して元来た道を上っていく。

のろのろと、とろとろと。

彼女の残した『重さ』が、今でも背中に張り付いて離れない。

街、寫眞、御伽噺の類

シノザキ

華露通りという通路がある。

一見上流階級の通りのように感じる名だが、実際は花街である。

噓せ返るような香や化粧の匂い。

煌びやかな明かりの中、鮮やかな朱色の扉が一際目立つ店がある。

その特徴的な扉を持つ『蓮月堂』に、キコはいた。

キコは動かない。

一つの冊子を、青みがかった黒目でこれ以上ないほど熱心に見つめている。

それは何枚もの絵が貼られているものだった。

ふと見つけた冊子が気になっていたところ、遊び相手となった女郎が見せてくれたのである。

「これ、絵？」

「絵じゃアないよ。シヤシンっていうのサ」

「しやしん」

「そ。シヤシン」

言いながら、蓮月堂の女郎はそのほっそりとしたしなやかな指先で「寫眞」と字を描いた。ふうん、と頷き、キコは興味津々といった体で、目の前に開かれたそれをじい、と見つめる。そんなキコの様子を些か奇妙なものを見るようにキコを見遣り、これは昔の“街”だねエ、と女郎は教え

た。まだ“街”がさほど入り組んではいない頃であろうその光景を見るのは、キコにとっては初めてのことであった。

「寫眞なんて珍しいもんでもないだろ？」

「そうなの？ 私、初めて見たわ。あのお部屋にはこんなものなかつたもの」
そう答えると女郎は一瞬呆けたような、なんとも言えない表情をした。

「……玉兎屋から“街”の昔やら成り立ちやらを聞いたことはないのかイ？」
不思議そうに女郎が尋ねると、キコはうん、と首を縦に振り「聞いた事がないの」と続けた。

玉兎屋の主は不思議な男だ。

先ほどまで窓際で煙管を楽しんでいたかと思うと、ふらりと姿を消している。かと思うといつの間にか帰ってきており、香茶などを楽しんでいるのである。全く不思議な男だ。

不思議といえば、この男は一体どうして自分を手伝いとして雇ったのだろう。

一応、小間使いのような形で働いてはいるが、あの男の素性は杳として知れないままである。そういうえば、室内にはこういった冊子のものはあまり見たことがないなど、はたりとキコはそこで思い至る。

あつたとしても、小難しい文章の羅列や何かの絵図や、細々としたメモ——少なくともこの“街”では一度も見たことのない文字だった——が書き込まれているようなものばかりで、

到底キコには理解できないものばかりであつた。

あれま、しようがないねエと呟く。

「まあ、アタシもちやあんと知ってるわけじゃないけどサ。昔はねエ、ここら一帯、なあンにもなかつたそうよ」

女郎の話によると、ここは元々まっさらな土地だったのだという。

そこにある日、突然団体がやってきた。

小さな石碑が立ち、それを祠で覆い、更に建物が建てられた。

それを護るかのように周囲に建物が建ち始め、やがて流れ者がそこに訪れ留まるようになり、小さな建物の村とも言えないような集落は徐々に規模を大きくしていったのだという。

そうして年月を掛け、今の“街”へと姿を変えた。

「初めてきいたわ」

「本当の話かどうかは知らないヨ。言い伝えのようなものだから」

どこかしみじみとした面持ちで呟いたキコの言葉に、念を押すように女郎は返した。

「ねえ、姐さん。その建物って今どうなってるの？ そんな立派で古い建物、目立つはずだけど見たことないわ」

二重三重に囲まれた建物なのだから、それはとても立派なものなのだろう。

しかし“街”にそのようなものはあっただろうか。そんな話を聞いた事もないのだが。

そう言うと女郎はするりと笑みを浮かべ「キコ、アンタもいつも目にしてるはずだよ」と言った。

「……いつも？」

「そ、いつも。あの“塔”だよ」

“街”の中で一番高く、そして一番影響力のある建築物である“塔”。

「“塔”？」

勢いよく顔を上げると、おかつぱの黒髪と赤いリボンが跳ねた。思わず聞き返してしまう。

「“塔”って、あの“塔”？」

「その“塔”しかないねエ」

面白いものを見たと言わんばかりの口調で女郎は答えた。

「ふうん……」

「さつきも言ったけど、言い伝えみたいなものだからネ。あの“塔”がそれだっていう証拠もない。ま、

おとぎ話としては面白いと思うけどねエ」

「姐さんは知りたいと思わないの？　気にならない？」

「ならないヨ」

「……そうなの」

アンタは本当、知りたがりねエ、と言い、女郎もまた寫眞に目を落とした。

この“街”のほとんどの人間は他者や物の過去に何があったのかということにあまり頓着しない。

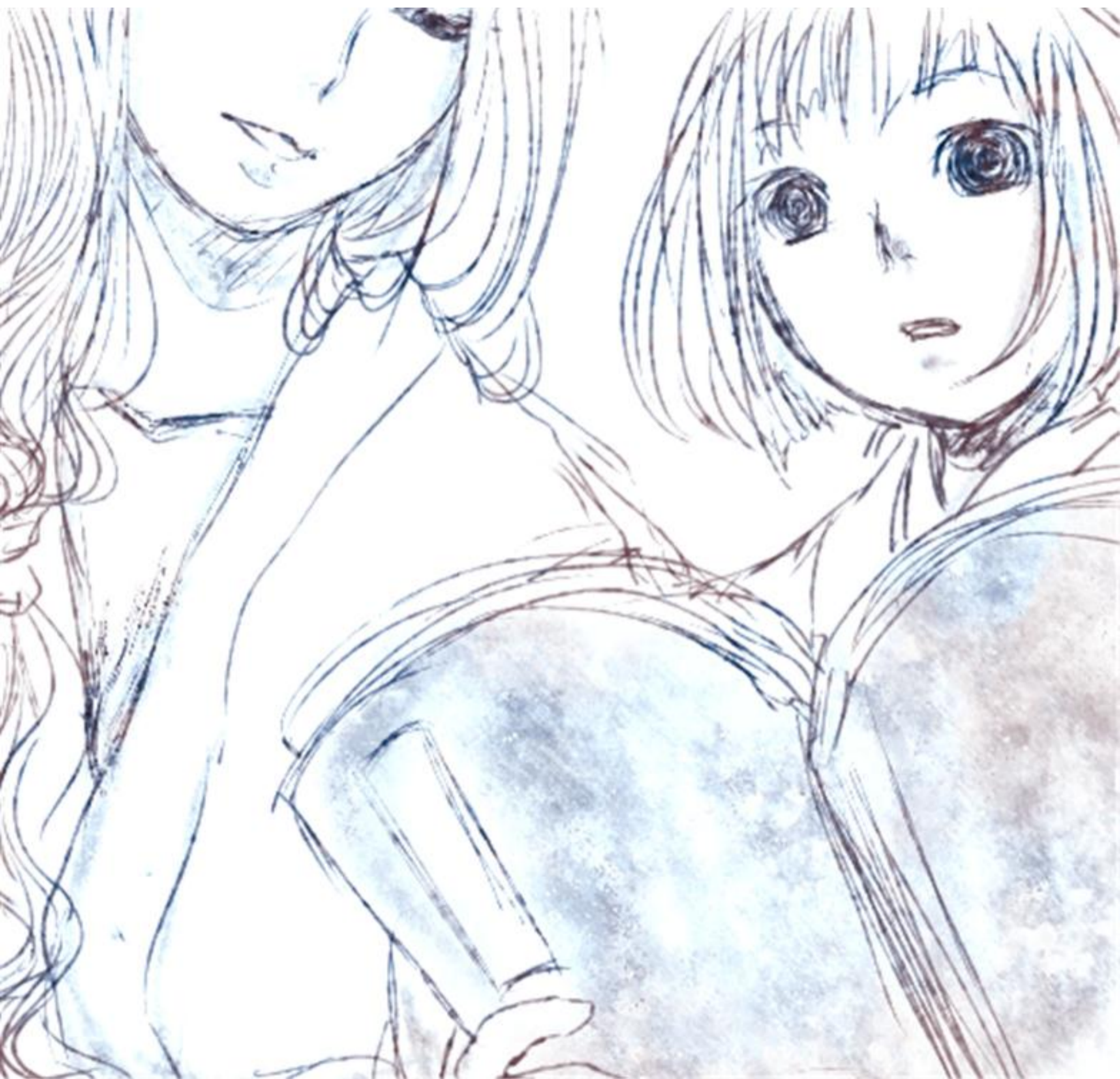
頓着しない、というよりは、興味が無いという表現が正しいだろうか。

キコ自身、どちらかというとこの“街”では目立つ出で立ちであるが、その事を聞かれたことはほとんどと言つて良いほどない。

今まで見知らぬ顔を“街”の色々な地区で見かける度にキコは興味を持ったが、周囲の人々は確かにさほど質問をせずに対応していたなど、その幾度か見た光景を思い出す。

時折不思議に思ったものだが、なるほど元々この“街”という存在が流れ者で出来た故なのか、とキコは内心で深く納得し、

みんなあんまり知られたくないことの方が多そうなものね、と考えたのだった。



始めに

死んでいる。

殺すつもりはなかったのだが、死んでいるのだから仕方がない。どうやら殺してしまった、ということのようだ。

状況を整理してみよう。彼女は私と交際のあった女性、だった。痴話喧嘩の末、暴行に及び致死、と言ってしまえば非常に明快で単純だが、これから私が取るべき行動は、それほど単純ではないだろう。何しろ、人が、死んだのだ。

この社会は人の死に対して非常に敏感だ。何らかの理由で人が死ねば葬式を執り行い、丁重に葬る。それが殺人であれば徹底的な調査が実施される。犯人は贖罪を求められ、そのような履歴が付いた人間は途端に社会から爪弾きにされる。

つまり私は、社会的な死の手前に位置しており、そこからの脱出を図らねばならない立場にあるわけだ。死の回避は非常に困難なことだろうと推察される。しかし不可能ではないだろう。状況を好転させる可能

性があるのなら、最大限その可能性を最大化するよう努力すべきだ、というのが私の信条である。人は考えるからこそ人であり、思考を放棄した者を私は人と認めない。

論点整理

まず現状の確認だ。此処は——自室だ。二階建アパートの一室。時間は夜の8時41分。天候は曇り。そろそろ秋口だがまだ気温が高く、今日は湿度も高い。目前のソファに女性の死体。死因は窒息死。絞殺痕が見えている。まだ周囲に気取られた様子はないが、先程の騒ぎがアパートの住人の記憶に残っている可能性は十分にある。いや、記憶されていると考えるべきだろう。すぐに騒ぎにはならないだろうが、明日以降は彼女の安否を探ってくる動きも出てくる。そうすれば私に追求か来るのは当然の流れだ。それまでに何か手を打たねばならない。タイムリミットは、——：そうだな、10時までには考えをまとめて、行動することにしよう。ぎりぎり不審に思われたい時間帯だ。

さて、さしあたっての検討事項は次のように整理できる。

- ① 痕跡の有無… 証拠、アリバイの類いだ。
- ② 行動の指針… 大雑把に言って自首するか逃げるかだ。
- ③ 実施方法… 実施する方法は無数にある。

まずは痕跡を確認して、その上で方針を決定、実施方法を選定する。問題はないか……？
——よし、では考えていこうか。

痕跡の有無

此処は自室であるから、私の痕跡があるのは当然だ。彼女の痕跡があるのも当然だ。消去の必要はないだろう。では、今日彼女が此処に訪れた、という痕跡はどうだ？此処に入るところを誰かに見られていたか……？わからない。彼女は、私が帰ってきた時には既に此処に居たのだ。

彼女は合鍵を持っていて、週に2回は料理を作って私の部屋で待っていてくれる。今日もその日だった。料理は、4回前と同じものだった。前から少し気になっていたが、どうも最近メニューがローテーションで決まっているように感じていた。最初はこうではなかったのだ。彼女なりに工夫を凝らして、味付けを少し変えるなどしていたものだ。正直美味しくないとときもあったが、それは気にならなかった。彼女が考えて、工夫したものなら。しかし最近はどうだ。全く同じじゃないか。私の記憶違いということもあるかと思つて今まで看過してきたが、どう考えてもおかしい。そこで私は尋ねてみた。今日は、どんな料理かな、と。彼女はこう言った。見ればわかるでしょ。いつもの通りよ、と。

私は彼女のどこが好きになったのだったか。彼女は理知的なほうではなかったが、とにかく精一杯に生

きていた。大学で出会った彼女は勉学に倦んだ様子もなく、積極的に教員に質問に行ったりする学生だった。整然とはしていないけれど、必死で疑問を伝えようとする彼女の顔を見つめているうちに、私はいつしか強く惹かれるようになった。彼女の熱情に。それから早かった。

卒業後、彼女は小さな会社の事務員として就職したが、それでも最初は生き生きと生きていた。趣味の料理にも力を入れ、初任給で新しいレシピ本を買ったと嬉しそうに語っていたのを思い出す。

それがどうだ。いつしか仕事に慣れ、料理のレパートリーも固定化し、ぼんやりとテレビを見ていることが多くなった。あの燃えるような熱情は、跡形もない。ああ！彼女は考えるのをやめてしまったのだ。そう気付いたとき、彼女は、彼女でなくなつた。

——いや、こんなことを考えている場合ではない。9時12分。どうも思考が冷静ではないな。最初に洗面所で顔を洗ったのだが、まだ目が覚めていないようだ。風呂に入って体を暖めれば筋肉が弛緩し肉体的にリラックスして、思考の巡りも良くなるかもしれない。精神は肉体に強く依存している。精神状態を操作するには、自己暗示と並んで肉体の状態を改善することが有効だというのが持論だ。病は気からと言うが、同程度に気も病に侵される。病とまでいかずとも、食事、睡眠時間、室温、衣服や寝具の清潔さ、ありとあらゆるものが肉体、ひいては精神に影響している。だからといって神経質になるのは本末転倒だが、精神の不調を感じたときにそういった身近の環境を見直すことで、改善が見られたことはこれまでに何度もあった。プラシーボであつてもいい。それは、効果があるということだ。

◆

習慣的に彼女はこの部屋を訪れており、曜日も決まっていた。この時点で、此処に来たことを否定するのは危険性が高いと判断できるだろう。しかし幸いなことに、このアパートには監視カメラが存在しない。彼女が此処から帰ったと偽ることは可能だ。このアパートは古くてドアの建て付けが悪く、ピッキング被害も近所で出ていることから——彼女の薦めもあって、引越し先を決めたところだった。今回の件は悪くないタイミングだ。これで、様々な工作が可能になる。

行動の指針

では指針を決めよう。今回の目的は社会的な死を回避すること、それが不可能ならばできるだけ今後の立場を改善すること、である。状況が絶望的であるならば自首をして罪状を軽減する方向に持っていくことも選択肢にはあった。しかし状況は悪くない。絞殺のため血液等の痕跡除去は不要であるし、死体の運搬についても引越しと一緒に行うことが可能だ。死体の保管などに課題は残るが、証拠さえなければ家宅捜索が行方不明段階で行われるということもないだろう。有望な選択肢として死体隠匿が残っている以上、これを中心に検討するのが得策だ。警察の構造上、事件が判明さえしなければ大規模な捜索が行われるこ

とは、まず無いと見てよい筈だ。

ああ、そういえば自殺するという選択肢も有り得るか。どうでもいい選択肢だが、確認は必要だ。死んだら思考することができない。従ってこの選択肢を選ぶときは、私が私でなくなつたときだろう。考えたくはないが……。今回は大丈夫。

死体を隠匿する方向で、具体策の検討に移ろう。今は——まだ9時21分か。

実施方法

大枠はこうだ。この場で死体に防腐処理を施し、一定期間保管した後、引越しと共に運び出す。できれば解体は行いたくないが、必要なら態勢を整えてから行う必要がある。このアパートでは音が筒抜けだ。外部での作業はリスクが高過ぎるし、引越し先での作業になるだろう。

腐敗すれば移動すら困難になる上、新たな痕跡も残りかねない。今は秋口だが温度も湿度も高い。防腐処理は早めにすべきだ。本格的なエンバールミングはできないし、する必要もない。さしあたり血抜きを实施しよう。血液は風呂に流すと検査があつた場合に面倒なことになりそうだから、洗濯機にでも流して、最後に漂白剤を入れて洗濯すればいいだろう。血抜きには時間がかかるな……。残りの懸案事項は作業をしながら考えていこう。まずは風呂から上がらなければ。

「ねえ」

耳慣れた声が聞こえた。脱衣所に影。

誰の声だったか。いや——忘れる筈がない。彼女だ。

しかし、そんな筈は、ない：いや、：そう言い切れるか？

どうして息を確かめなかった？

どうして脈を確かめなかった？

どうして、ちやんと、殺しておかなかった？

咄嗟に否定したのは、認めたくなかったからか？致命的なミス。冷静に行動しているつもりで、全く冷静ではなかったらしい。こんなミスを犯すとは：、どうかしている。まったく：。今後の課題だろう。だが、起こってしまったことは仕方がない。9時31分。まだ慌てるような時間ではない。

状況を、整理しよう。

(了)

あとがき、或いはこじつけの着想

人間は考える葦であり、

葦は悪しでもあり、

そして葦はまっすぐで強い。

葦の髄から天井を覗くとどうなるのだろうか。

彼あるいは彼女は、そんな人間です。

――

科学的アプローチというものは、

常に観測結果に基いて行われる。

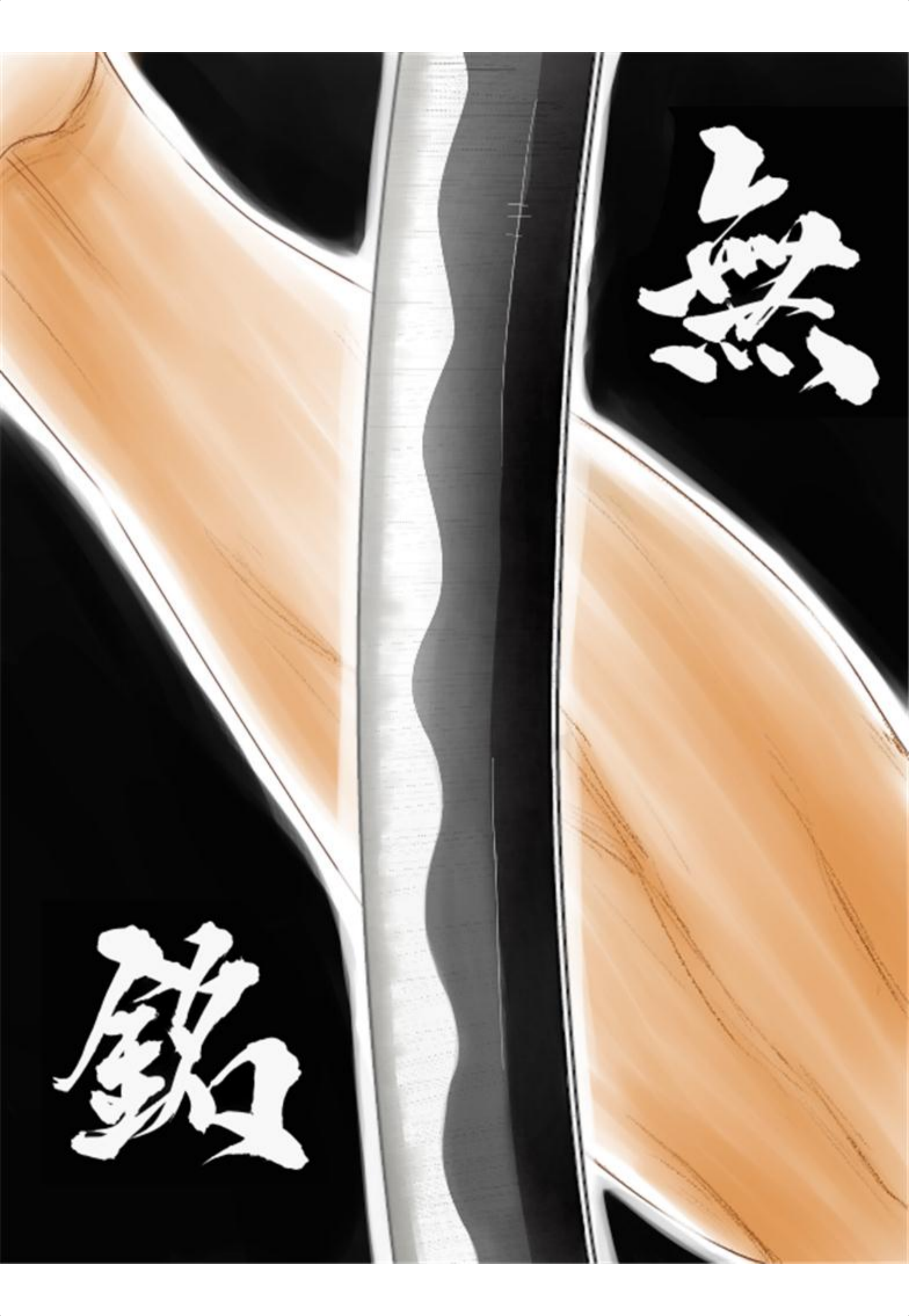
それは即ち過去に基いて判断するという行為に他ならない。

というわけでテーマ「過去」をクリアするということで、ひとつ。

あとあれだ。この物語はフィクションです。

現実の犯罪行為を推奨するものではありません。

字数は3600字ちよいくらいです。たぶん。



鐵

扇

序「一振り」

男は無言で腕を振りおろす、鎚が朱の塊と交わり火花が瞬き、闇に消える
もう幾千、幾万と繰り返した、淀みなく舞うように繰り返す

此処には朝も昼も夜もない、灰と泥と鉄に塗れながら、火と風を眼前に置き、
割り、積み、叩き、延ばし、折り、重ね、そしてまた叩き

それらを繰り返し、一つの塊を、一振りの刀へと創りかえていく

脆く弱いものを、より硬く、より強く、より靱やかに、

それが、それこそが、それだけが、男にとっての絶対だった

ずっと願って望んで求めてきた、今その手応えを感じている、
表情は変わらない、しかし昂揚していた、確かな予感があった。

そうして鍛えが終わり、素延べ、火造り、切っ先をつくった。

焼刃土を纏わせて、充分に熱し、湯船に落とした、一拍の後、音を立てて水は湯になった。焼きを入れて刃文が出て、焼きを戻して粘りが出し、研ぎで艶と輝きをもたせた。

独り月明かりの下、腰を下ろし、柄拵えもしていない抜き身の刀身を立て、見据えた。

壺「少年と壮年」

暑い夏の日、少年。

15歳の夏、不自由なく育ってきた彼には目標も夢もなかった。

周囲の人は、将来は立派にだとか、良い学校に、などとよく理解らないことばかりを言う。

家出をした、何かに不満があったかと問われれば全てが不満で、裏を返せば全てが満たされていたとも言える。

若者は自転車に乗って旅に出た、手持ちの中で一番大きい鞆を持って。

何処か行きたい場所があった訳でも、何か見たい物が在る訳でも、誰か会いたい人が居る訳でも、ない。何かわからない何を求めていた。

ひたすらに道を行った。孤独には慣れていた、寧ろ何も縛るものがない事に清々としていた。

数日が経ったある夜、山の麓で休んでいると遠くから何かの音が聞こえてきた、最初は遠雷かと思ったが、どうやら違うようだ。

音は時折止んで、また鳴る、何の音だろうかと考えている内に微睡んで眠りに落ちていた。

翌日早朝、あの音は止んでいた、ここは人里からは少々離れた場所である、

不思議に思いつつ朝食代わりのバナナを食べながら地図を見た、川に沿って細い峠道があるだけだ、人が居そうな雰囲気はない。

川辺に下りて、顔を洗い、水を濾して水筒に入れる、少し不思議に思いつつも今日中にこの山を越えてしまおうと自転車に跨る。

出発して数日、雨に降られていないことは幸運であったが、山中は朝霧に包まれていた。

12段あるギアを1番軽くして漕いでいる、時折立ち漕ぎをしながら遅々とした進みではあるが、この調子なら日が暮れる前に山を降れそうである、昼を前にして足を止めて休憩しようと思ったその矢先である、霧で道の曲率を読み違えた。

一瞬のことであった、次に気が付いた時には川辺に滑落していた。

「いててててて……」砂利の上でそう言いながら辺りを見渡す、水筒はすぐ隣に落ちていた、上方を見上げると此処から5 m程のところ突き出た木に自転車が宙吊りに引っ掛かっていた、鞆の端が峠道の際にあるのが見えた其処までは大体7 m程、何とか斜面をよじ登れないことはないかと思ひ身を起こそうとする、と同時に左足首に激痛、捻挫で済めば良かったのだが、落下した衝撃か落ちる過程でどうやら骨折してしまったようだ、それと幾つかの擦過傷。

近くの岩に何とか腰掛けて、水を飲み一息ついて考える、見る間に左足首は腫れ上がって1.5倍ほどの太さになってしまっていた、

人の通りがあれば声を張り上げようと思っていたが1時間経っても2時間経っても人が通る気配はなかった、

ポケットを探ると飴玉が3つと十徳ナイフ、空は曇っている。

飴玉を舐めながら耳を澄ませていると、昨夜も聞いたあの音が聞こえてきた。

飴玉も全て舐めてしまい、人通りもないまま、夕方。

何日もつだろうか、ふと頭によぎるのは「死」という単語だ、腹が鳴る、もう水しか無い。

あの音は数分おきに聞こえたり、途中30分程度聞こえなくなったりもするが、また聞こえてくる、どうやら遠くのそこには人が居るらしいが声を上げてても到底届くとは思えない。

日が暮れることに不安を抱き、痛む足をおして、小川まで這って行った。

たった数mの距離を移動しただけで、呻きながら脂汗をかいた。

水筒を水で満たし、頭に巻いていたタオルを絞って熱をもって腫れ上がっている足首に掛ける。

辺りが闇に落ちた、月明かりだけが周囲を照らす、虫の音、風の音、小川のせせらぎ、

そしていつの間にかあの音は消えていた。

こんな状況でもなければ良い夜だったのかもしれない、

ずっと仰向けでいるが川辺の石がゴツゴツして非常に寝心地が悪い、今日が終わってしまおう。

途端に例えようのない恐怖が襲い掛かる、寒くもない筈なのに歯の根が合わずにカチカチと鳴る、

自分を抱くように肩を抱く、自然と涙が溢れ出る。

孤独には慣れていた筈だった、否、それは本当の孤独を知らなかったただけだった。

自分が凄く小さい存在だと知らしめられる、今が冬でなくて良かったなと考える。

いや、冬ならもう終わっているから苦しみが少なかったのかもしれないな、

と、思考は段々と負の方向へ傾く。

熱をもっている左足は動かさない、いや痛みに慣れて動かせるか、と勘違いし少しだけ動かしたがそれ

は気の所為だとも言うように激痛が走る。

深く眠ることも出来ずに翌朝川辺で浅い眠りから覚醒する、水を飲む、それ以外に出来ることはない。

上半身を起こす、左足は放り出したまま、右足を立ててそれを抱く、もしも此処でこのまま死んだら鳥か野犬に喰われるのだろうか、と不吉な想像を巡らせていると、視界の端、川上の川向こうに何か動く影が見えた、人間かと思つてそちらへと視線をうつすが・・・月輪熊だった。

小川の水を飲みに来たのだろうか、考えていたよりも現実的な恐怖に駆られ、水筒を放り出し昨日滑落した方へと後ろ向きに這い出す。

黒い影はゆっくりと小川を渡ってくる、昨日はあれだけ苦勞して移動した距離だったが苦痛が恐怖に勝つたのだろう、すぐ後ろに斜面を背負っていた。

熊は相変わらず四つ足でゆっくりとした様子ではあるが、直線的に此方に向かってくる、認識されているのは絶対だ。

ぜえぜえと荒い息を吐きながら何か無いかと焦りながら周囲の石を手当たり次第、手に取つて熊に向けて投げる、焦りか恐怖か投石は全く当たらない、

2 mほどに近づいた頃であろう、拳大の石が熊の頭部に命中した。

感に触れたのか今まで悠然としていた熊が突然に猛烈な勢いで突進してきた、なす術なく地表に押し倒され、右の肩口を押さえつけられた、

恐怖で固まっていると今まさにポケットから落ちた十徳ナイフが指先に触れた、自らを奮い立たせそのまま手に取り片手で器用に刃を出し、

渾身の力で熊の右腹に刺そうとした、

しかしその貧弱な刃では毛と皮と筋肉を突き抜くことなど出来なかった、弾かれてナイフを取り落とす。

熊が口を開けているのが非常にゆっくりと見えた、

走馬灯を見る間もなく、走馬灯に見る物もない。

終わったと思ひ、眼を閉じた。

しかしその時は訪れなかった、数瞬の後、不意に重さが消える、

右側に温かい何かを感じて恐る恐る眼を開くと赤い血に染まっていた、

但しそれは熊のものであると気づくのにもまた数瞬を要した。

俺を押さえつけていた熊の左腕がドサツと音を立てながらそれ単体で倒れた、

いつの間にかもう一つの影が現れて熊と熊の腕を切り離していた。

混乱していると腕を切り落とされ地を転がる熊に迷いなく白刃が突き立てられた。

不意に声が掛かる「おい、お前さん何やってんだい？」

興奮などは微塵も感じられない落ち着いた声で、そう問われた。

誰に掛けられた言葉か考えてしまった「あの、えっと、その・・・」

何からどう説明していいのかわからず狼狽していると、腹が鳴った。

白髪の壮年男性はそれを聞いて笑いながら言った

「腹が減ったか、そりゃ良い、自殺志願者という訳じゃなさそうだな」と、白い歯を見せる。

それを見て、安堵からか自然と涙と笑いが零れていた、しかしそこで意識が遠のく、

「おい、おい、おい、」と男が呼ぶ声だけが聞こえていた。



悪夢を見た、そして汗だくになりながら目が覚めた、夢は覚醒とともに雲散霧消してしまい、最早覚えていない。

半身を起こした、服を着ていない、体の様子を探る、左足首は固定され包帯が巻かれていた。鞆と水筒が枕元にあった、喉の乾きを感じて水筒を開け水を飲む、温い川の水だったはずだが今は冷たい水が入っていた。

鞆の中から服を引っ張り出し四苦八苦しながら身に纏った、治療されているようだが左足首は相変わらず熱をもっている。

左足に体重を掛けないように、よろよろと壁に手をつき立ち上がり部屋の外へ出る、普通の住宅と言うよりは質素な作りの山小屋といった趣である。

居間などもあるようだが内部に人の気配はない、あの男は何処に居るのだろうと、右足だけ靴を履きおぼつかない足取りで外へ出る、目が眩む程の日が照っている、昼ぐらいであろうか。

紺の作務衣に身を包んだ白髪の壮年が何か作業をしていた、男が此方に気付いて手を止めた

「おう、起きたか」と、声を掛けてくる「気分はどうだ？」

「はい、えっと、生きています」そう返すと男は愉快そうに破顔した

「それは見りやわかる、それとも何だ此処は地獄か天国か？」

「あるいはそうかもしれません」そう言いながら、ぐうと腹が鳴る

男に、こっちへ来いと言われ、小屋に戻り昼食を共にした、

食後に茶をすすりながら、男に「さて、それで」と切り出される、

真剣な双眸で「お前は何をしていたんだ？」

そう問われ言葉に詰まる、男は続ける「命をかけるに値することか？」

「・・・わかりません」そう、一言だけ絞り出す。

「そうか、その足は治るのに1ヶ月程度かかる」男は続ける

「1週間は満足に歩けもしないだろう、少なくとも下山はその後だな」

「あの、本当に有難う御座います」陳腐な感謝が口から出る、

次いで一拍置いてから「お仕事を手伝わせて貰えませんか？」と、

「仕事、仕事か」男は不思議な表情を浮かべる、

確かに15歳の自分に出来る事などありはしないのかもしれない、

しかし、ただただ世話になることも出来なかった。

見定めるような視線で此方を見る

「ふむ、まあいい兎に角、1週間は何も出来まい、治療に専念するんだ」
優しくも厳しくもないような風に言われた、「……はい」としか答えられない。

最初の1週間は様々な話をした、歴史の事、書の事、料理の事、、、、
次の1週間で色々なものを見た、研ぎや彫り、鍛冶場、あの音の正体も理解った、
更に1週間、男の手伝いをしながら悩んだ、そして理解しようとした、
最後の1週間、思い、考えた。足は日常生活で問題ない程度には治っていた。

男が珍しく夕餉に酒を持ちだした、勧められ初めて酒を口にした。

普段から寡黙な男ではないので、この1ヶ月、本当に様々な話をきき、そして話をした。

少し酔っている男は優しい口調で「君は明日、山を降りなさい」と口にする

一瞬の沈黙、真剣な顔で黙って頭を下げ言う「弟子にして下さい、お願いします」

数瞬の沈黙、頭は上げない、「貴方は若い、此処には何も無い、多分それは若気の至りだ」

こう言われるであろう事は予感していた、未だ頭を上げずに「世界が広いのは承知しています」

男は困った様子で「教えられることなどたかが知れている、やり直しができなくなるぞ」

「それで構いません、お願いします」 「ふう……頭を上げなさい、条件が幾つかあります」

「はい！先生！」 「先生は止めて下さい」 「では、師匠」 「……まだそちらの方が良いですね」
条件は、明日下山して家に帰ること、学校を卒業すること、周囲を納得させる事、
そして五体満足で来春此处に辿り着くこと。

翌朝、引き上げておいた自転車に跨り小屋を発つ

「それでは御師様行って参ります」 「はい、気を付けて」

油切れした自転車は不満気に音を立てていたが、澄んだ青空と同じく憂いは晴れていた。

終「無銘」

あれから15年を経て師は亡くなった、それから30年の月日が経った

そして真に得心のいく一振りが出来た

刀には年号のみ、刀工の銘も刀の銘も1度たりとて入れたことはなかった

心に刻めばそれでいい、それだけでいい

無銘、刀工不詳



978XXXXXXXXXX



192XXXXXXXXXX

猫のpochi

画:眼鏡 題字:かくのおん

1.

街並みが白く染め上げられ、歩く人々が厚手のコートやフード付きの上着に衣替えしてから一月ほどが経とうとしていた。

まだ数日先の話だというのに、あちこちの街頭に掲げられた聖夜の看板が僕にはありがたくない。何しろ今現在これといった予定はなく、今後入るような気配も微塵もない。

彼女の一人もいれば違ったのだろうが、携帯の電話帳に入っている女性なんて家族や親戚の名前ばかり。職場も所持持ちの同性ばかりなうえ、仕事が終われば寄り道もせず家に帰っては倒れこむように布団で眠りにつく生活。出会いを求めて出歩く時間も体力も残ってはいない。

冷え込んだ空気を避けるために突っ込んでいたポケットの中で触れる、今となっては時代遅れも甚だしい折りたたみ式の携帯電話を取り出してみる。

開く親指にわずかな期待をのせてはみたものの、電気の通った液晶画面に表示されたのは、飾り気のない初期設定の待受け画面と「新着なし」の文字だけだった。

思ったとおりではあったが、落ち込む回数にも度合いにも際限はない。肩を落とすほどの深いため息が口をついて出て行った。

この携帯とも何年一緒にやってきただろうか。

僕が中学生高校生の頃は、紛うことなき第一次携帯電話群雄割拠の時代だった。

大手三社から続々と発売される新機種に一喜一憂し、友人と一緒にカタログや特集雑誌を眺めながら、次はどの機種を買おうかなどという話題に花を咲かせていた。

この会社は良い音源を使っている、いやこっちはカメラの画素数が優れている、やっぱりあの会社の機種は微妙、などと休み時間に盛り上がっていたものだ。

一年、場合によっては半年程度の間隔で過去を凌駕するスペックの機種が出てくる時代。

少ない小遣いでは機種変更の資金を捻出することができず、当時は携帯新機種発売に備えてアルバイトをしていたようなものだ。

料金形態に疎い持ち始めの頃、通話料と通信料金合わせて数万円などというのは、僕も周りも当たり前だった。

今思えば高い授業料である。今の感覚で数年前の自分を思い返し、自嘲気味の苦笑いが浮かんだ。

刺すような冷気で赤くかじかんだ右手に握られた携帯電話。高校三年の夏、発売された当日に飛びつくように購入したもので、世間一般での評価もかなり高かった当時の最新機種。

あれほど新機種や情報に飛びついていたのに、夏を過ぎた頃にはいやおうなしに受験・就職の波に巻き込まれ、

緊張のあまり何一つ内容を覚えていない面接を経て、気づいた頃には今の職場で仕事をしていた。

幸い同僚や上司に恵まれた素晴らしい職場だ。……もう少し給料が高ければ。

いや、今の時代、人か金のどちらかに恵まれているだけで十分だろう。野暮な思考を無理やり寒空に放り出す。

兎に角、今の自分にはあの頃のように、携帯電話を調べる余裕も変える理由もないまま数年が過ぎていた。職場において携帯電話に求められるものは、通話とメールが不足なくできれば良いという機能性であり、最新だとか画素数がどうかというスペックは必要ないもの。

就職活動の次は仕事を覚えなければならず、新しい機種や性能をチェックしている余裕がないまま時間は過ぎ去り、同時に自分の観念も変わっていた。

“動いていれば十分だ”と。

2.

しかしこの携帯電話もそろそろ寿命が近づいているのを感じていた。

視認に不便はないものの、液晶画面は猫が乱雑に引っ掻いたように、縦横斜め小ささまざまな傷がついている。

すでに指に染み付いているため不便はないが、ほとんどのボタンは印字がかすれており、よく使う箇所に至っては塗装が完全に剥がれてわずかに変色したプラスチックが露出している。

スピーカーに不備があるのか内部的の接触不良か、はたまた送られるはずの信号が発されていないのか、朝目覚まし代わりに設定しているはずのアラームが鳴らないのがここ数日、僕を悩ませていた。

目覚ましがなくても何とか目は覚めるものの、覚醒するのと布団から出るのは違ったベクトルの労力を使う。いわゆる二度寝の誘惑が僕をかどわかそうとするのだ。

再び眠りに落ちるのを防ぐには、外部的な要因で無理やり布団から出るように仕向けなければならぬ。そこでアラームだ。自らの手が届かない位置で鳴る喧しい音を止める為には、どうあっても布団から出る必要がある。

一度布団から出てしまえば二度寝の心配はなく、同時にわずかではあるが歩行運動をすることで肉体も覚醒に傾く。

遅刻を防ぐ一石二鳥の手段なのだが、アラームが壊れてからは始業時間ギリギリに職場に駆け込むという、精神的にも心証的にもよろしくない日が続いていた。

「この携帯とも別れ時かな。手を切る時期か……」「手を切る」……クククク……」

普段とは違う笑い声が漏れる。僕自身はふと浮かんだ漫画のワンシーンを真似してみたただけなのだが、丁度近くを歩いていた女子大生位の女性二人が、怪訝な視線で僕を見ながら声を潜めて何かを囁き合っていた。

知らない人間から見れば以下の二つ、古臭い携帯電話の画面を見つめて妙な笑い声を出している変質者か、いきなり「手を切る」などと言い出した頭のおかしい変質者のどちらかに見えたのは間違いないだろう。

一気に現実を引き戻され、冷気にさらされていたのとは違う赤みが頬に差した。意味もなく咳払いをひとつして携帯を折りたたみ、何事もなかったかのように歩き出す。一刻も早くこの場から逃げ出したかった。

幸いなことに、目の前に広がる歩道は直進か左折という二つの選択肢を僕に用意してくれている。建物の

陰に身を隠せる左へと足が動いた。

僕の左折と同時に、道路を走り抜けていく車が揺らしたのぼり旗。その模様が強烈に目に留まる。

「信じられねえぜ：こういうのを奇跡っていうんだな、めったにある事じゃねえ：こんな街角を曲がった先に、偶然携帯電話キャリアの支店があるなんて：」

機種変更を考えている僕の前にあらわれたのは、かれこれ十年近く使い続けている携帯電話キャリアの支店だった。

会社名だけが無骨に描かれた看板の上辺には、可愛げのない無表情が特徴的な、キノコを模したキャラクターが鎮座していた。

ちょうどスーパーマーケットの青果コーナーでキノコの歌が流れていた頃だろうか。まるでパク：：：大きな流れにあやかかる様に、このマスケットキャラクターが誕生したのは。

不意の再開に懐かしい気持ちがかみ上げてくるのを抑えられない。まだこのキャラクターが続投していた事実が、胸の奥に眠っていたあの頃の情熱の残りカスを再び燃え上がらせた。

街に吹く冷たい風は本来の目的を見失い、猛る熱源に注がれる酸素の如く、心の火をさらに激しく焚きつける。決心は一瞬の事だった。

3.

機種変更をする。

ただそれだけのことなのに、喉は焼けるように熱く乾き、心臓は太鼓のように絶え間なく拍動している。口は真一文字に結ばれて目は見開き、荒い鼻息が耳障りな排気音をたてる。その姿はさながら興奮状態のゴリラのように見えたことだろう。

緊張極まった硬い表情で店内へ続く二重扉をくぐる。扉に設置されたベルが小気味よく揺れて鳴り響き、顧客の来店を店内に告げる。

泥落としのマットに足が触れた瞬間に鳴り響く、あの頃を変わらない入店音。まるで十年ぶりの帰省だ。だがしかし、店内が赤と白を基調とした聖夜向け営業のおもむきを見せているのが少々癪に障る。ここでも、彼女の居ない僕をあざ笑うのか。

せっかくの興奮が一気に引いていくのを感じた。しかし携帯電話の調子が芳しくないのは事実だ、機種変更だけはしていかなければ。

トナカイと白ひげ爺さん、そして世の中のカップル達が煮えたぎる地獄の釜の中に消えていく光景を想像することで、湧き上がる怒りと苛立ちを抑え込む。

「いらっしやいませ」

柔らかかで温かみのある声が投げかけられる。落ち着いた雰囲気纏うその声に、一度収まりかけた僕の緊張は再び頂点に返り咲いた。

入店の際に自然と俯いていた顔を、潤滑油の切れた歯車のようなぎこちなさでゆっくりとあげると、声から感じるイメージ通りの穏やかな笑みをたたえた店員の女性が佇んでいた。

変質者的な表情を顔面に貼り付けた僕を見ても、微笑みを欠片も崩さぬまましつかりとこちらを見据えて

いた。

女性と会話をするのは何年ぶりだろうか。女の気配もない職場だけに、事務的な会話すらすることがないまま年月は過ぎていた。

星の飾りやツリーの装飾がなされた店内に客は僕一人で、その応対をするために馳せ参じたこの女性店員という状況。僕に逃げ場はない。

否。思えば今までの人生の中で、僕に逃げ場などなかったのかもしれない。

数十年も整備されていない錆び錆びの機械人形のように緩慢でぎこちない足取りでカウンターまで歩き、勧められるままに椅子に腰掛ける。

座った瞬間、自分がどう歩いたかはもう忘却の彼方だった。右手右足を同時に振り出していたのではないか、そんな後ろ向きな思考が逡巡すると気が気ではなかった。

「あ、あの！機種変更したいんですけど！」

女性店員が口を開くためにわずかに前にのめった瞬間、反射的に口が開く。

買い物に行った際に店員に主導権を握られるのが嫌いな僕は、例えば服屋で店員が近づいてきたときには自分から言葉を切り出すようにしていた。

そうすれば話かけようとしていた店員は面を喰らってリズムを崩して自分のペースにもっていけることを、過去の経験則から知っていたから。

過去というのは人間に反省と進歩を与える。その成果の一つだった。

会話を切り出しかけたところを遮られた形になる彼女は一瞬驚いたように目をぱちくりさせていたが、一

瞬で表情を戻してきた。この辺りがプロたる所以なのだろう。

感心すると同時に、この優しい笑顔が作り物の営業スマイルであることを実感した。僕だけでなく、誰にでも向ける愛想笑いの一つなのだ。

「機種変更ですね。変更なざる機種は、お決めになられていますか？」

店側にとって至極当然の質問が返ってくる。どうやら僕は主語が抜けていたようだ。

最近の機種などほとんど知らないが、朝晩自宅で飯を食べる際に流していたニュースでしつこいほどに報道されていた、世界的に有名な新型携帯電話の名前だけは強烈に頭に焼きついていた。

とりあえずそれでいいだろう。有名なものを使っておけば間違いはないはずだ。

かつて携帯電話の知識を漁っていたとは思えないほどにそっけない選択理由に、知らぬ間に変わっていた自分に、ほんの少しのセンチメンタルを覚える。

昨今は叩いたりなぞったりするだけで操作できる、という程度の知識しかないが、使っていくうちに覚えていくだろう。そして、染み込んだ頃にまた時代は変わっていく。

そう、鬚がざんぎり頭になったように、時代は変わり、過ぎた時間は過去になっていくのだ。

この機種変更も、きつと数年後には思い出しては笑ってしまうような“過去の日”になるのだろう。

ポケットに眠る携帯電話との別れを決定付ける一言を、数ある最近機種の中で唯一知っているその名を、ほんの少しの寂しさとともに目の前の女性店員に告げた。

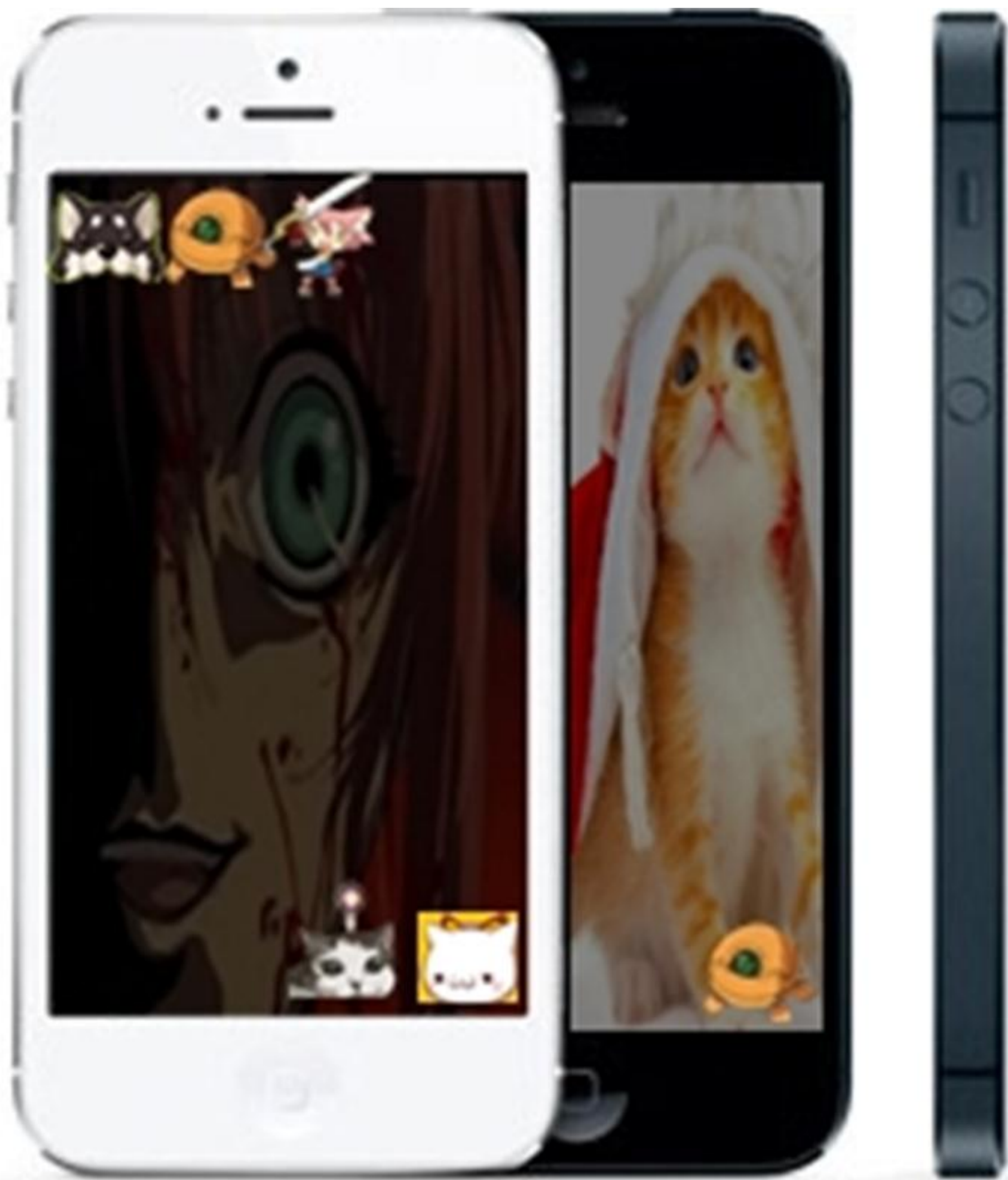
「iPhone5へだよ」

「お客様、当店はdocomoショップです」

4.

「ということがあつてな……」

「おじいちゃんってばうっかりさんだねー」



あとがき

思いつきを推敲せず書き続けたらテーマが迷子になった気がするので、「これテーマ関係なくね？」と思っただらはいじいてくだちい(っ、ω、ε)

ヘンガー

1.

「どうしてこうなっちゃったんだろうな、俺たち」

さほど大きくない四人がけのテーブルに、胸ポケットから取り出した煙草の箱を投げ置き、安物の四脚椅子に腰を投げ出すように腰掛けた。

暖かい日の光が差し込む部屋の中、彼女は何も言わぬまま、俺とは正反対の方向にある窓を向いている。解決の見えない問いかけに返ってくるのは、不愉快に唸る冷蔵庫の駆動音だけだった。

きっかけは些細な口喧嘩。最近お互いの仕事が上手くいかず、それが生活にも悪影響を及ぼしていた。多分二人とも、自分の中に積もり積もった苛立ちを吐き出してしまいたかったのだろう。

普段なら気に留めない小さな事に突っかかりたり嫌味を言ったりして、張り詰めた空気が我が家を支配する。間の悪いことにその時期が二人同時に到来してしまった。

笑って流せるようなことを取り上げて、八つ当たり気味に当り散らしあう風景がここ一ヶ月続いていた。数年吸い続けている煙草をくわえ、愛用のライターで火を付けると、ライターオイルの何とも言えない香りがかすかに鼻をつく。

明るく晴れた昼時の窓の外では、いつもと変わらない日常風景が広がっている。電車は定刻通りにレール

ルを走り、オフィスでは会社員が春の陽気の中で新年度の業務を進めているのだろう。すぐ近くの市民公園からは、暇を持って余す大学生が夜を待てず、満開の桜の下で能天気にはしゃいでいる声が聞こえていた。大した思慮なくと遊び呆けられる環境を素直に羨ましく感じる。

肩が落ちるほどに深いため息がこぼれる。吐き出された白い煙は天井に近づくにつれ、空気に溶けるように消えていった。体内に取り込んだ不健康な充足感が肺を駆け巡り、穏やかな安堵感が体を満たしていく。

「お前は煙草が嫌いだったな。この一本で吸い納めだ、今だけは勘弁してくれや」
独り言のように吐き出した懇願もまた、音のない空間に吸い込まれるように衰微した。最後の一口を思い切り吸い込むと、まるで吹き戻しが戻ってくるような勢いでフィルターの前まで煙草は燃え尽きた。

桜の開花は新たな生活の始まり。万人にあてはまるわけではないが、少なくとも俺の人生はその言葉通りに進んできた。良いか悪いかはわからないが、今年の春も新たな環境と付き合っていかなければならない。

短くなった吸殻を灰皿の底面に押し付け、もう一度深い深いため息をつく。オイルの香りはすでに空気にまぎれ、鼻先に戻るのは鉄のような香り。

数ヶ月前に彼女の趣味で購入した薄桃色の絨毯には、大小さまざまの赤黒い斑点が規則性なく散りばめられていた。

玄関の外が騒がしくなってきた。入り口のドアノブを乱暴に開けようとする音が、リビングまで響いてくる。どうやら開錠を忘れていたらしい。開けてやろうと思ったが、一度腰を下ろしたことで、無意識に

抑えていた疲労感がどつと襲ってきた。もう自分の意思では立ち上がることができないだろう。足に力を入れようとしても、込めた力がどこかへ漏れ出しているように芯が入らない。

だがさつき電話で連絡はしてある、俺が鍵を開けようが開けまいが勝手に入ってくるはずだ。時間がたつて気持ちが悪く落ち着いた頃、胸の内から湧き水のように徐々に、しかし確かに湧き上がってくる後悔と、大事なものが抜け落ちたような欠落感。

無意識のうちに頬に雫が伝い、心臓が早鐘を打つ。小刻みに震える手でくしゃくしゃになっているであろう顔面を覆った。声にならない嗚咽と、喧しくドアを叩く音だけが、静まり返った家に響いていた。

2.

思ったよりも短かった刑期を勤めあげ、紅葉が街路を埋める頃に俺は塀の外へ出された。薄っぺらい布で作られたロングコートが寒空の風で緩やかになびく。彼女の髪も、風が吹けば同じように柔らかく舞っていたことを思い出す。

二人の監視員が警護する門を抜けると、初老の男性が一人でこちらを見つめていた。

射抜くような鋭い視線で、真っ直ぐに俺を見据えている。見知ったその顔に懐かしさと後ろめたさを覚え、交差する視線を逸らすように会釈をする。

「お久しぶりです」

「ああ」

短くそれだけ言うと、彼は踵を返して一人歩き出した。数歩分の間隔を維持しながら、彼の進む軌跡をなぞるように俺も歩みを進める。

秋の風は人通りの少ない昼間にも寒々と吹きつけ、肌に残る冷たい渴きがいずれ来る冬を否応無しに意識させる。

かつて義父と呼んだ彼の足取りは鉛のように重かった。監獄から二百メートルほどしか離れていない駐車場に辿りつくまでがいやに長く感じた。

見覚えのないシルバーの乗用車は持ち主の背中と同じように少しくたびれ、車体の底の辺りは赤茶けた錆が目立っている。少々痛んだ外観から推察するに、俺が服役を開始して間もなく手にしたもののようだ。最初の一言以降会話もないまま車に乗り込む。お互いのシートベルトの着用を確認するとセルが回され、眠っていたエンジンが弱弱しい唸りをあげて蘇る。

流れるラジオの音だけがこの重苦しい空間を取り持っていた。パーソナリティの陽気で軽快な語り口が今はありがたい。

「迎えに来ていただけなのか、半信半疑でしたよ」

沈黙に耐えかね、思ったままの言葉が口をついて出る。視線を前に向けたまま、そうか、とだけ言うと会話は途切れた。表情を変えずにハンドルを握る横顔は、俺が記憶している姿よりもずっと老けて見えた。

八年もたてば人は変わる。年齢を重ねるほどその度合いは顕著になっていく。今年の冬で還暦を迎える彼の顔には深い皺が刻まれ、髪はその面積の半分ほどがまばらに白く染まっていた。ハンドルを握る手も少し筋肉が落ち、以前よりも骨格の隆起がわかりやすく見て取れる。

後続の車が居たならば間違ひなく渋滞の元になるであろう、徹底した安全運転で一時間ほど走ると、目的の場所に到着する。

街を一望できる高台は爽やかな風が吹きぬけ、周囲は緑の茂る開放的な立地だった。ここに彼女は眠っているという。先日訪れたばかりだという彼の案内を受けて少し歩くと、見慣れた姓が刻まれた墓石が佇んでいた。

久々の行為に戸惑いながらも火をつけた線香のその香りは、その身が茶毘に付したことを強烈に実感させてくる。手を合わせ目を閉じると、様々な情景が想起される。

どれほどの時間そうしていただろうか。数分にも、数時間にも思える祈りの時間を終えたとき、先ほどまで後ろに立っていた彼の姿はなかった。

3.

気を利かせたのか、それとも胸に去来する何かがあったのか、彼は一足先に車に戻っていた。

そのまま車で今も残されている我が家へと送り届けてもらう。やはりというべきか、車内は終始無言だった。ここままで、彼に依頼した要望は全て満たされた。

「今日はありがとうございました」

入り口を開錠した後、彼に鍵を手渡し、そこで別れる。最後まで表情や態度が一貫していたのが救いだっ

人死にがあつた以上、恐らく売りに出しても買い手はつかなかつただらうが、念のため家は自分の名義のまま保持しておいてもらった。

彼女の墓参りを済ませ、帰る場所にたどり着いた。あとは義父と交わした約束を果たすだけだ。内から鍵を閉めると本能的に電気のスイッチに手が伸びる。音だけが響くが、当然電気は灯らず薄暗い廊下が続いていった。彼女が最後を迎えたりビングを通り、かつて寝室だった部屋を目指す。

予想外なことに、思っていたよりも家内は整然と整えられており、埃ひとつない完璧な状態を保持していた。この様子だと、恐らく昨日のうちに一通り掃除したのだらう。過度に汚す心配がないことに改めて胸を撫で下ろす。

寝室も同様だった。あまりの変わらなさに、まるで八年前に戻ってきたように錯覚にとらわれる。ベッド脇の棚に目をやると、備え付けた目覚まし時計もそこにあつた。もつとも、とうに電池切れで活動を停止していたが。

綺麗に敷かれたベッドに力なく腰掛け、深呼吸で気持ちを落ち着けて心の準備をする。懐から取り出した小瓶のふたを開けると、力を込めすぎたか勢い余ってフタが手から零れ落ち、地面と衝突して軽い金属音を立てた。拾い上げるのに伸ばした手を止め、手皿を作って瓶の中身を受け止める。どうせもう閉める事はないのだから、落ちたままでもかまわない。

一粒、二粒、三粒……。左手に乗せた錠剤を一つずつ右手で口に運び、唾液と絡め、意を決して飲み込んでいく。次第に唾液の出が悪くなって口内が乾いてくるが、乾ききった頃には滑らかに喉に入り込んでいくので寧ろ好都合だった。

半分ほど飲み込んだ頃から徐々に意識が不安定になってきたが、手は脳を介さず動いているかの如く、クレイゲームのような単純動作を繰り返す。ドラマでは手にあけた錠剤を一気に何粒も飲み干していたが、物を飲み込むのが苦手な人間にはとても真似のできない行為だった。

俺からすれば、今こうして錠剤を流れるベルトコンベアの如く、流れるように喉に投げ入れている事自体が奇跡的なのだ。

錠剤のほとんどが左手で形作った手皿から消えた頃、ついに体を起こし続けることもできなくなり、力を失った上半身は倒れるようにベッドに沈んだ。

「あなたって、本当に薬を飲むのが下手ねえ」

突然頭に響いた声に驚き、ぼやけかけた瞳が正常な視界を取り戻す。目に映るのはすっかり暗闇が支配した部屋の天井だけ。わずかに残った体力で首を左右に動かして部屋を見渡しても、声を発する者の姿は無かった。

混濁した意識のせいで、幻聴でも聞いたのだろう。ふっと気を抜くと、覚醒した意識が一気に緩んで泥沼のようなまどろみに浸かっていくのを感じる。

目の前が再びモザイクに包まれると同時に、右手が最後の一粒を口に投げ入れた。鮮明さを失って揺れる世界がゆっくりと回りだす。浮遊感に抱かれて回転する光景は、現実から離れていく自分を意識させる。意識が沈みかけたとき、まるで漫画の吹き出しのように、視界の一部分だけがくつきりと何かを映し出しているに気がつく。

あれはまだ付き合っていた頃。風邪をこじらせて布団から起き上がれなかった俺を看病に来てくれた時

の光景。さきほど聞こえたのは、風邪薬をなかなか飲み込めずにいた俺を見た彼女の声。

走馬灯のように、過去の記憶が一つずつ浮かんで消えるのを繰り返していく。そのほとんどは、彼女が微笑んでいるもので占められていた。半身が削り取られたと紛うほどの欠落感が胸を支配する。今わの際、改めて自分が奪ったものの尊さを認識した。

回っていた視界が歪んでひしゃげ潰れるのと、かろうじて開いていたまぶたが閉ざされる瞬間はほぼ同時に訪れ、肢体は重力に逆らう力を失って一層ベッドに深く埋もれる。

頭を指すようにして、手足の末端からゆっくりと感覚が失せていくのが感じられた。

感覚の喪失が首まで到達した頃、閉じた目尻からすつと涙が一滴だけ、指先で撫でるように頬を流れる感触が伝わる。

肌を伝うその行方を見届け終わる前に、薄らいだ意識は夜の暗闇に溶けるように掻き消えていった。

補足っぽいアレ

文字数・4415文字

テーマが「過去」。正直言ってテーマに沿ってるか書いてる本人もわかってないんですけど。

人生って大体いい事と悪いことが半々ぐらいの割合で起こると思うんだけど、過去とか思い出をほじくりかえすと

優先的に「あの頃は良かった」類の記憶が掘り起こされると思うのね。

全てが良い思い出じゃないはずなのに、時間がたつにつれてどんどん美化されていって、良い思い出の割合が増える。

ゲームでよく言われる「思い出補正」に近い感じ。題名もそのまま。

今回書いたのの主人公がまさにその典型で、絶対喧嘩とかすれ違いがあったらうに思い浮かぶのは良い記憶ばかり。

勝手に過去を美化して、今に思考を戻したときに「何であんなことしちゃったんだろう」って修造みたいな後悔してる人。

皆そんなもんだと思うんですけどよね。“今”から眺める過去はちよつと綺麗すぎるっていうか、美化されすぎっていうか。

何書いてるかわかんなくなってきた。そういう感じで、一応テーマに則ってると思い込ませてくれ。

突貫工事な出来のうえ、
メ切りは思いつきり過ぎたけど、
感想日前ってことで許して！

この度は『始発』をダウンロードいただき誠に有難うございます。

この作品は戯曲調となっております。

そのため“獄卒SS企画”の趣旨から若干逸れるかもしれませんが、何卒ご容赦ください。

ご意見、ご感想などありましたら、Twitterのハッシュタグ“#獄卒SS企画”で呟いてくださると有難いです。

それでは、本編をお楽しみください。

平成24年11月12日 ものべん

□駅の待合室 (夜)

古びた駅の待合室。照明は中央にある埃かぶったシャンデリアのみ。クッション性の悪い革張りの長椅子が一脚だけ部屋の真ん中に鎮座している。その長椅子の上で、男1は眠っている。そこへ制服姿の男2が現れる。

明転

長椅子の上で寝ている男1。ボソボソと寝言を話します。

男1「いやあ、もう勘弁して下さい……。それはできません……。いや、そういうわけじゃないんです……」

一呼吸置いて、男2が指で鍵束をジャラジャラと鳴らしながら、上手から登場。舞台中央付近で立ち止まり、上着のポケットから紙を取り出し確認する。

男2 「えーっと、（下手を指差しながら）事務所の消灯良し、（上手を指差しながら）正面ドアの施錠良し、本日の業務は終了、っと。思ったより仕事が少なかつたな」

男1、再び寝言。

男1 「申し訳ございません。この通りです……。いや、パンツまでは脱げま、はい、脱ぎます、すぐ脱ぎます」

男2、男1の声に驚き、後ずさりする。

男2 「えー、ちよつと、えー、誰？」

男1 「はい……。確かに言いました。『何でもする』と、しかし、いくらなんでも、これはちよつと……。できません、はい、決して正座は崩しません」

男2、恐る恐る男1に近づく

男2 「あの、ものすごく追い込まれた状況のようですが、大丈夫ですか？」

男1 「それは無理です。さすがに大き過ぎます。駄目、駄目え！」

男1、叫びながら跳ね起きる。男2、その声と動作に仰天し、尻餅をつく。

男1 「だ、誰？」

男2 「あ、あなたこそどちら様です……、か？」

しばしの沈黙。

男2 「私は、ここで働いているものです。あなたは？」

男1 「あ、あの、俺は……、あれ？」

男2 「どうしました？」

男1 「ここ、どこ？ まったく記憶にない所なんだけど……」

男2 「ご覧の通り、駅ですよ」

男1 「駅？ ああ、またやっちゃったのか……」

男2 「何をやっちゃったんですか？」

男1 「いやあ、俺、って酒を飲むと記憶がよく飛ぶんだよね」

男2 「ほう、それは大変ですね」

男1 「そうなんだよ。特に今回は酷い……。まったく思い出せない」

男2 「なるほど、ということとは、あなたはこの駅の関係者ではないんですね？」

男1 「えっ？ まあ、部外者だけど、なんで？」

男2 「いや、私、配属されたばかりでして」

男1 「へえ、そうなんだ。悪いけど、今、何時か分かる？ てか、終電ある？」

男2 「時間は分かんないですね。終電はないです。始発しかありません」

男1 「おいおい、ここは駅なのに時計もないのか？ あんたも駅員なんだから、腕時計くらいしとけよ」

男2 「すいません。必要ないものは付けられない主義でして」

男1 「まったく、なんなんだよ。終電ないのかよ」

男1、苛立ちながら、辺りを見回す。その後、自身のポケットを弄る。

男1 「（頭を抱えながら）無い、何も無い。ケータイも時計も財布もバッグも……。どうすんだよお。これじゃ、誰かに連絡もできないし、それに電車もタクシーも乗れないじゃん」

男2 「大丈夫ですよ。気を楽しんでください」

男1 「『気を楽しに』だ？ どう考えても詰みでしょうよ。あんたが金を貸してくれる、って言うのかい？」

男2 「んー、貸しませんね。正確に言うなら、貸せません。なぜなら、私はお金を持っていないからね」

男1 「あんた、使えねえな。もういいよ。俺は歩いて帰る」

男2 「いやいや、それは困ります。それにここをどこだか分かっているんですか？」

男1 「どうせ糞田舎の駅だろ。歩いていけば、夜も明けるだろうし、朝になったら車も動き出すだろうから、ヒッチハイクでもするさ」

男1、歩き出し、上手に向かって消えていく。しかし、数秒後、足早に男2の元へ戻ってくる。

男1 「なあ、ドア、開かないんだけど」

男2 「はい、施錠してますから当然です」

男1 「『当然です』じゃねえよ。早く開けろよ」

男2 「それはできません。これは決まりですから」

男1 「何の決まりだよ。監禁でもするつもりか？ ああ、さては誘拐だな？ おまえは、この国での誘拐事件の検挙率を知ってんのか？ 平均90%だぞ？ まあ、それ以前に俺のために金を払う奴なんていねえから。あんた、悪いことは言わないから諦めなよ」

男2 「ゆ、誘拐だなんて滅相もございません。それに事が済めば、無料で電車も乗れますから」

男1 「無料で？ その前に『事が済めば』、ってなんだよ。まさか如何わしい事を考えているんじゃないだろうな。おいおい、またかよ。勘弁してくれよ！」

男2 「はて、“如何わしい事”とは何でしょう？」

男1 「如何わしい、ってのは、アレがアーなって……。言えるか！ 言えるもんか！」

男2 「落ち着いて下さい。あなたは何か勘違いをしています。いいですか、イチから説明しますね。あなたは死んで、この駅にたどり着いた」

男1 「（食い気味で）なんだ？ 今度は宗教の勧誘か？」

男2 「まあ、最後まで聞いてください。あなたは死んだから（床を指さしながら）ここにいるんです。ここは、そういう所なんです」

男1 「あんた、頭大丈夫か？ ほれ（足をバタつかせながら）、足も付いているし、体調もすこぶる良い。だから、俺は死んじやないよ」

男2 「どうすれば納得してくれるかなあ。そうだ」

男2、上着の内側からモタモタしながら、タブレット端末を出す。

男1 「それ、内ポケットに入れるものじやないだろ」

男2 「バッグは持たない主義でして」

男1 「社会人失格だな」

男2、不慣れな手付きでタブレット末端を操作し、男1の方に液晶を見せる。

男2 「はい、これ、あなたですよね。名前、身長、体重、足のサイズ、生年月日、本籍地、住所、生まれ

てから死ぬまでの経歴、全部乗ってるでしょ？」

男1 「ちよつと貸してみる（タブレットを受け取る）。こういう情報は、興信所に金を積みめばいくらでも手に入るん……」

男2 「どうしました？」

男1 「なんだよ、これ。何で知ってるんだよ。どうなってんだよ」

男2 「（タブレットを覗き込みながら）ああ、あなたが初めてオナニーした日の項目ですね？」

男1 「そこじゃねえよ！ いや、そこも気になるけどさ。一番気になるのは、ここだよ、（液晶を指差しながら）ここ！」

男2 「その項目が何か？」

男1 「どうして、さつき見ていた俺の夢まで把握してんだよ」

男2 「あなたの夢？ いいえ、その項目には、あなたが“死に至った経緯”が書かれているんです。ですから、現実ですよ」

男1 「そんな、まさか……」

男2 「あなたは結婚詐欺に失敗し、被害女性の兄が率いる集団に拉致される。男色の男たちに陵辱されそうになるが、“誰が最初にやるか”という内輪揉めの混乱に乗じて、からくも脱出に成功。だがしかし、逃走途中に立ち寄ったコンビニにて強盗と鉢合わせする。格闘の末、脇腹を複数箇所刺され、帰らぬ人になったんです。ほら、この画像は、絶命直後のあなたですよ。これを見て何か気が付きませんか？」

男1 「なんだよ、これ。俺はグロイの苦手なんだよ」

男2 「確かに超キモいですけど、ちゃんと見てください」

男1 「超キモいとまでは言っていないだろ。わかったよ、ちゃんと見るよ。えーっと、床が血の海になって、白いワイシャツが真っ赤に染まっている。えー、他には……」

男2 「もう充分です。答えが出ました」

男1 「答え？」

男2 「はい、ほら、これ」

男2、ニヤつきながら、男1のシャツを指差す。

男1 「あ、えっ、なんで……」

男2 「今、あなたが着ているシャツは真っ白でしょ？」

男1 「ホントだ……、まるで新品みたいだ。ん、新品？」

男2 「どうかしましたか？」

男1 「わかったぞ。俺が寝ている隙に、あんたが新品のシャツに着替えさせたんだ！」

男2 「えっ？」

男1 「それにあのグロ画像は合成だ。なぜなら、俺はあんなに不細工じゃない。どうやら、詰めが甘かったようだな」

男2 「何を言っているのか、さっぱり……」

男1 「やっぱり、あんたは俺を拉致して洗脳するつもりなんだな」

男2 「もう、いい加減に信じてくださいよ。先に進ませてください」

男1 「冗談じゃない。（左胸に手を当てながら）まだ俺には熱き血潮が流れているんだ！」

男2 「どうやったら信じてくれるんですか……」

数秒間の沈黙

男1 「えっ、あれ？」

男1、忙しく、胸、手首、首筋を触りだす。

男1 「落ち着け。いいか、そんなはずはない。あり得ない。俺は絶対に信じないぞ」

男2 「ああ、死んでいるんだから、脈はありませんよ。最初から、こうすれば良かったですね。まだこの仕事に慣れていないので要領を得ていませんでした」

男1 「そんな……」

男2 「ようやく、納得していただけたようですね」

男1 「じゃあ、俺はこれからどうなるんだ？」

男2、うなだれている男1からタブレットを受け取る。

男2 「えんまちょう 閻魔帳” っ て聞いたことありませんか？ 閻魔様が死者の生前の行為や罪悪を書きつけておく帳

簿のことなんですけど、それがこれです。そして、これを元にして、あなたに審判を下すのです」

男1 「誰が？」

男2 「私が」

男1 「何の審判を？」

男2 「あなたが天国に行くべきか、それとも地獄へ行くべきかの審判です」

男1 「俺は天国に行けるのか？」

男2 「では、さっそく調べてみましょう。少々お待ちください」

数秒の沈黙

男1 「あー、死んじやったのかあ。なんか実感ねえな」

男2 「(タブレットを操作しながら) 死んだ皆さん、そうおっしやるらしいですよ」

男1 「“らしい” っ てなんだよ」

男2 「前任者から聞いたんです」

男1 「仕事仲間とかいるのかよ」

男2 「そりや、いますよ。上司もいますし、部下もいます。あ、私は閻魔ではないですよ。閻魔代行です」
男1 「代行？」

男2 「はい、閻魔一人でこなせる仕事量ではありませんから、分業制です」

男1 「俺がいた世界と似てるな」

男2 「そりや、そうですよ。ほとんどは元人間なんですから。はい、結果が出ましたよ」

男1 「どうなんだ？」

男2 「えっと、目に余るマイナスで地獄行きですね」

男1 「あっさり言うなよー」

男2 「殺されたことを鑑みたとしても、やっぱり詐欺常習犯、ってのは頂けませんね」

男1 「だよなあ。地獄かよー。死んじやうよー」

男2 「いや、もう死んでますよ」

男1 「知ってるよ！ それぐらい凹んでいるんだよ。なあ、どうにかならないの？ 俺だって良い事したよ？ もっと拡大解釈してくれよ」

男2 「拡大解釈ですか？」

男1 「そう、無意識だけど、“結果的に” 良い事をしたとかさ」

男2 「あつ、確かに、そういうのはカウントしていませんね。やってみましょう」

男1 「（小声で）やってくれるのかよ……」

男2 「（タブレットを弄りながら）何か言いました？」

男1 「いや、何でもない。続けてくれ」

男2 「これも結果的に善行かなあ。それとこれもそうだなあ。あ、これも善行つと。これなんか結果的に五人の命救ってるもんなあ。これで終わりかな。よし、トータルが……」

男1 「トータルが？」

男2 「トータルが……」

男1 「早く言えよ！」

男2 「プラスマイナスゼロです」

男1 「俺はどうなるんだ？」

男2 「非常に言い難いことなんです……、生き返ってもらいます」

男1 「はあ？」

男2 「だって、天国にも地獄にも行けないんですから」

男1 「そういうものなの？」

男2 「はい、死ぬ十分前に戻ってもらいます。ですから、コンビニに入店した直後ですね」

男1 「また、あそこに戻るのかよ。仕方ねえ。地獄に落ちるよりはましだ。で、どうやって生き返るんだ？」

男2 「簡単ですよ。（下手を指差しながら）こちらを真っ直ぐに進むとホームになっていきますから、次に来る電車に乗ってください。乗ってたら、気が付くとコンビニに立っているはずですよ」

男1 「電車に乗って現世に帰るなんて、変な気分だな」

男2 「急いでください。あと少しで電車が到着します」

男1 「終電なかったんじゃないのかよ」

男2 「ですから、ここは始発しかないと言ったじゃありませんか。さあ、早く。走って！」

男1 「（下手に走るだしながら）お、おう。世話になったな。じゃあな！」

男2 「（深々とお辞儀をしながら）お気をつけて、行ってらっしゃいませ」

汽笛の音が鳴る。男2、舞台中央に立つ。

男2 「いやあ、騒がしい人だったなあ。改心して、良い人生を送ってくれるといいなあ。よし、今度こそ本日の業務終了、っと。」

上手から何かを叩く音がする。

男2 「えっ、何の音？」

男1 「俺だよ、俺。開けてくれよ！」

男2 「また、あなたですか！」

暗転

【終わり】

朝起きると、枕元には一枚の書置きがあった。丁寧な字でこう書いてある。

『新しい僕へ。僕は今の人間関係、生活環境その他諸々。どうにも生き辛くなってしまったので、過去を捨てることにしました。記憶を失った訳ではありません。頑張って自由に生きて下さい。宜しくお願いします』

なるほど、確かに自分が誰だったのかも、何をしていたのかも思い出せない。いや、正確には思い出せないのではなく自ら放棄したのだろう。

しかし、起き抜けに頑張って生きろと言われても、そう行き先の思いつく人間はいない。まずは自分の状況を把握しなくては。ひとまず周りを見渡した。

部屋は綺麗に片付いている。男にしては——そう、俺が男なことくらいはさすがに分かる。男にしては几帳面な性格だったのだろう。立掛けてあった写真には、美形と言っても差し支えない、おそらく自分が写っている。俺は同じ顔だが、同じ表情が出来るかまでは分からない。これも一つの遺影となるのだろう。

他にも好きな作家の本、好きなアーティストのポスターなどを見つけた。どの本も内容は覚えているし、曲名を見ればメロディーを口ずさむことだって出来る。でもどうして自分がそれらを好きだったかはまる

で思い出せなかった。記憶喪失は日常的な道具の使い方などは忘れないと聞くが、それとはまた違う……まるで人伝の情報を見ているかのようである。

とりあえず部屋を見渡して分かることと言えば、まあこんな程度だ。部屋を出よう。これ以上のことは、いるかも分からない家族に訊くのが手っ取り早い。

部屋を出て階段を降りるとリビングに出た。広めのリビングは自分の部屋同様に片付いており、新居と言っても不自然ではない程に綺麗である。そして、飾ってあるインテリアや家具から、単なる綺麗好きではなく、我が家が比較的裕福であることまで分かる。

少しずつ情報を集めながらリビングを見渡していると、その奥から人の声がした。

「起きたの？ 荒人？」あらひと

そう言って恐る恐る出てきたのは、中年の女性だった。部屋同様に小綺麗な身なり。一見上品だが、やや神経質そうな目をしているように見えるのは、過去の記憶の残滓のせいとは言い切れないだろう。知らない女性だ。でも状況から誰か分からないこともない。

「母さん……なのかな？」

産声にも似た台詞を俺は吐いた。母親らしき人は、初めはやや怯えていたようだが、すぐにホッとした表情になりこちらに寄ってきた。

「良かった……。昨晚は妙なことを口走って部屋にこもっちゃったから、てっきり家出でもするんじゃないか……。でもそんなことするわけないわよね」

「あ、いやあーまあ、その……うん……」

俺はただひたすら、あうあうと赤ん坊のように呻くしかなかった。

「——と言うわけで、俺は今日までの過去は捨て去ったから、あなたのことも良く覚えてないんだ」

「つまり記憶喪失なのね？」

がつくりと俺は肩を落とした。まあ普通はそう取られてしまうだろう。だからこそ腰を据えて説明したのだが、一向に理解してもらえない気はしなかった。

「可哀想に……。確かに最近は何々と忙しかったし、一時的に混乱しちゃうのも仕方ないかね。分かったわ。しばらくはゆっくり休みなさい」

母らしき人は言った。理解はされなかったが、理解ある母親であったのは救いである。いくら日常生活の記憶はあるとは言えど、いきなり普通の生活に馴染むのも難しいと思っていたのだ。これでひとまずは落ち着けると安心してしていると、母は続けて言った。

「それでも学校は勿論ちゃんと行くとして、今日の分の習い事は課題として、後で先生に送ってもらいましょう。直接行けない分、量は多めにしてもらわないとね。それで今日一日休んで、明日からはちゃんと全部の習い事も予備校も頑張りなさいね」

「……………」

再び部屋を見渡す。壁一面に並んだ数々の賞状。特賞や最優秀賞といった文字が安売りにされていた。そして一際立派な紙には『四当五落』と掲げてある。

眩暈のするような景色を見たところで、ようやく俺の職業が判明する。

優秀な受験生。真っ白だった俺のスケジュール帳は、1時間もしないうちに暗転していった。

——それでも彼が逃げ出すにはまだ足りない。

その1時間後には、学校へと到着していた。

自分がどこの高校に通っていたかは訊かなくてはならなかったが、場所に関しては問題なく覚えていたので、来ること自体に苦はなかったは救いだ。

自分の所属しているクラスでは、教室に入るなり複数の同級生が挨拶を投げかけてきた。俺としては孤立しているくらいのほうが、状況的には楽になっただろうが、皮肉なことにかつての自分はクラスでもそれなりに人気のある存在だったようで、男女問わず声をかけられ、何人かには様子がおかしいと勘繰られてしまった。仕方なしに俺は今朝のことを説明する。

「信じられないかもしれないけど、実際みんなの顔見ても初対面としか思えないんだ」

それを聞いて中には冗談だと思いきや、多くは怪訝な表情を浮かべて怪しんでいる。冗談か？

おかしくなったのか？

からかわれているのか？

怪しみなければそうすればいい、俺自身でさえ自分の存在が不透明なものにしか思えないのだ。

そんな不穏な視線の奥で一人の女子生徒が勢い良く教室に乗り込んできた。

「ちよつと荒人っ！ 過去を捨てたとか、覚えてないとかどういふことなのっ？」

女の子は人波をかき分けつつそう言った。可愛いと言うより美人と言える容姿をしているが、釣り目気味の目は怒りで更に吊り上り、その眼光は言葉以上に熾烈にこちらを突き刺していた。彼女はその綺麗さを装飾でなく、全て武器として身にまもっているようだ。

「まさか私のことまで忘れてるとか言わないでしょうね？」

「えつと、それは」

「あなたの！ 恋人である私を！」

彼女の怒声に一瞬教室が静まり返る。しかし、特別それを騒ぎ立てる様子がないところを見るに、彼女のこういった言動は初めてのことではないようだった。

「ごめん、悪いけど今の俺には良く解らないんだ。自分のせいとは思わないけど、怒ってる原因が自分にあることは確かだし、謝るよ」

俺としては事を荒立てないように説明したつもりだったが、彼女にはそれが煽りにしか思えなかつたらしく――

バシんツ！

その平手打ちが彼女の答えだった。

「何言ってるの？ 馬鹿じゃないの！」

怒りで震えるようにそう吐く。やれやれ、分かってはいたが聞いては貰えないようだ。これはいくら謝ったところでどうにかなるものでもないだろう。

俺は改めて彼女に向き直し告げる。

「今のは昨日の自分の不始末に免じての一発だ。だけどだ、次からはただの他人の暴力としてしか受け取らないからな」

反抗の言葉は予想外だったのだろう。彼女は怒るでも悲しむでもなく無言で立ち尽くしていた。

俺は彼女は本来被害者ではあると思う。しかし同情はしなかった。彼女は昨日の自分が、たとえ消滅しても捨てたかった忌まわしき過去の一部なのだから。

一旦授業が始まってしまうと、学校はなんてことのない平穏な日常へ変わった。授業も問題なくついていける。クラスメイトは時々好奇の目を向けては来るが、今朝のこともあり積極的には声をかけて来ない。そうして俺の登校初日は呆気ないほどの平和さを維持したまま放課後を迎えた。

休み時間もたまたまに質問をしに来る者はいたが、曖昧な返事しか返せないでいると次第に話しかけてくる人は減り、終わりには空気のような扱いになっていた。確かにそれは気楽ではあったが……だが、ここが

自分の場所でない感覚は否が応にも感じてしまった。

(やっぱり学校にわざわざ来る意味なんて……)

明日からどこへ行こうか——そんなことを考えていると不意に後ろから肩を叩かれた。

「よう、荒人。あ、と言っても分からないだっけか？ ははっ別にお前の言ってることを信じてるわけじゃないけど、一応初めましてって言っとくか」

声をかけてきたのは、彼曰く比較的仲の良かった友人であるらしかった。「とりあえず話は帰りながらしようぜ」と言う彼に従い、俺はようやく冷静に話が出来そうな相手に安堵しつつ通学路を遡る。

「それにしても今朝のあの女の顔は笑えたな。俺はお前ら二人のことは前から知ってるけど、あんなこと言うお前も、あんな顔するお前の彼女も初めて見たわ」

別に嫌味で言った訳でもないようで、心底面白そうにそう語る。

「そんなに珍しいことなのか？」

「珍しい珍しい！ と言うか昨日までのお前がむしろおかしかったんだけどな。俺の知ってる限り、お前が誰かに反抗してるの見たのも初めてかもしれないし。ほとんどの人は恋人同士つつーより単純な主従の関係と思ってたくらいだろうな。いつもなら殴られたって踏まれたって、ニコニコ笑いながら謝ってるだけのお前があんなこと言ってたら俺だって驚くわ」

家にあつた写真の笑顔思い出す。あれは楽しくて笑っている笑顔だっただろうか。思い出せない。

「まあ元々俺はあの女好きじゃねーけどな。お前の顔が良くて逆らわないのが良くて付き合ってるのが見えなかったし、お前もただあいつに一方的に合わせてるだけにしか見えなかったよ。他人の俺がとやか

く言うのも何だがお前の母親にしたってそうだ。ただ優秀で言うことを聞くだけのお前を疑いもしてなかった。俺に言わせてみればそんな人付き合いでも何でもない、ただお前の人生を貪ってるだけだ」
貪られた。過去の俺は自分で捨てたと言っていた。しかし、実際には家から時間を削られ、恋人に意思を削られ、自らの性格で自由を削り、削り切ったその果てに消えてしまったのかもしれない。だとしたらこの俺は何なのだろうか。

「……とりあえず色々教えてくれてありがとう」

どこへ行くべきかは更に分からなくなってしまったが、自分の来た道だけは何となく分かった。そのことについて友人に礼を告げる。

「ははっ！ 別に大したことじゃねーよ。それでこれからどこに行くんだ？」

「とりあえず学校は辞めるかもしれない」

残っていてもかつての自分を知る人たちを混乱させてしまうだけだろう。しかしそれを特別残念とは思わなかった。そう、この感情はまた別の……。

そう言うと友人は寂しそうな顔をして言った。

「そうか……仕方ないな。そうだ、こんな時に言うのも何だが、実はお前にひと月前いくらか貸してあったの思い出したわ」

彼は寂しそうな——惜しむような顔で続ける。

「今のお前には寝耳に水かも知れないけど、今後会えなくなるかもしれないしな。あー今手持ちがなくて大丈夫。いつものように家の前で待ってるからよ」

そうだこの友人らしき男も自分も感じているのは寂しさなんかじゃない。

「悪いな。金なら返せない——いや、貸せない」

確かに過去に金を借りていたかどうかは分からない。しかし俺はこいつの表情を知っていた。恋人が向けていた視線よりも更に即物的なその表情を。

「ああ？ 話だけ聞いて借りた金も返せねーのか？ 荒人のくせに！」

先ほどまでの悲しむような表情とは違い、明らかな敵意と侮蔑をこちらに向けてきている。

しかし、俺の中で渦巻いていたのはそれ以上の怒りだった。

勉強で縛り付けた親にか？ それもある。

人を利用し続けた恋人にか？ それもある。

目の前のこいつにか？ それもある。

だがそれ以上に許せないのは、それらの責任を投げ捨てて、俺に押し付けた昨日の自分だ。いくら支えきれないほどの重責でも、それだけを捨てるなんてそんなことをするべきではなかったのだ。自由に生きるというのなら、それは逃げる行為を押し付けただけに過ぎない。

「何黙ってんだ？ とりあえず出すもの出せば今日は見逃してやるって言ってんだから、はやく——」
バキッ！

「がつ…っ！」

とりあえずうるさい口を殴りつけて黙らせる。口から血を流しながら目を回す元友人の横を通り過ぎつつ言った。

「学校辞めるのはやめた。家も出ない。どこにも行かない」
昨日の自分は過去を捨てたと言っていた。そして自由にしろとも言っていた。なら奴が捨てたものを捨てるのも俺の自由だろう。捨い尽くして返しに行く。それが俺の選択であり、最初の抵抗だ。

俺は捨いものをするために日の落ちかける学校へ再び足を向けた。

私は人魚姫じゃない

ワタシトハ、ホカノセイブツトハ、コトナルモノダツタノカモシレナイ。

ナマエ？ナマエツテ？

コトバハワカルケドウマクハナセナイ。

シヤベルコトガウマクナイ。

ワタシハウマレテキテヨカッタノ？

ネエ、ウマレテキテヨカッタノ？

私は五体満足だ。

そういう表現は間違っではないけれども、強いて言うなれば私には表現というソレが欠けていた。ソレは誰でも持っているもので、動物であれば嫌でも持ち合わせているもの。

生命の誕生と共にソレは存在するもので、ソレが無ければ大変な思いをして生きていくことになる。ソレには感情の全てが含まれていて、性格や形までが含まれている。

分かりにくかったかもしれない。ソレとは声のこと。

ソレを欠いていた私が突然にして喋りだしたというのは、やはり不自然に思えた。

通常であれば人間の赤子は親であったり、周囲の環境に適応しながら順を得て言葉を覚えながら音を探り、喋りだす。

私は違った。通常の知能を持ちながらも突然喋ることを許された、檻から放たれた動物のようで、怖かった。

初めて発した言葉は・・・覚えてはいない。

なぜなら自分のソレがあまりにも気持ち悪かったから。

コレガワタシノコエ・・・

まるでロボットのようだと周囲にも理解されず、何より自分自身のソレが嫌いだった。大嫌いだった。

でも私はソレに耐え続けた。

私にソレを与えてくれた『あの人』が、いつも笑っていたから。

私が発するソレにいつも『あの人』が笑顔で答えてくれた。

その笑顔で私は嫌いなソレを受け入れるようになった。

そして『あの人』は私にこう言った。

「今まで我慢してきたことはなに？」

ガマンシテキタコト・・・

「キミは歩けるし、笑うことだって出来る。でも声を貰った今、何がしたい？」

コエ・・・

『あの人』は私をずっと見つめていた。

私から答えを引き出すのを待っているわけではなく、それはそれは愛おしいモノを見つめるような眼差しだった。

オシヤベリシタイ

「それから？」

『あの人』の優しい眼差しがまぶしくて、そしてちよっぴりくすぐったくて……一息ついて私は力強く答えた。

ウタイタイ!!!

それこそが私の本音だったのかもしれない。自分の気持ちを表現できない理不尽さに慣れてしまっていた。そしていつの間にか音楽というものを避けて生きていた。歌いたいという本音と共に少し涙というものがこぼれた。『あの人』は私の涙を指で掬い上げると優しく頭を撫でて言ってくれた。

「一緒に頑張ろう」

生まれて初めて時間が止まって欲しいと願った。

私が本音を漏らした。そして、『あの人』が私に触れた。

初めての出来事だった。

『あの人』の笑顔さえあればと過ごして来たつもりが、いつの間にか近くに居たいという感情やもつと触れて欲しいという感情まで芽生えた。

私が頑張れば頑張るほど『あの人』は笑ってくれたし、傍に居てくれた。

私は歌い続けた。

ロボットののような角のある声から少しずつ角が取れていく。

それは『あの人』の努力そのものだった。

『あの人』はいつも傍で肯いて見守ってくれていた。

それから暫くして、下手な感じがまた良いと評価してもらえるようになり、『あの人』ではなく曲を提供してくれる方が増えてきて、いつの間にかレコーディングの話や何千人もの前で歌う機会が出来たり、今までの私からは考えられなかったことだった。

気付くと私はブームという波の渦中に在って、ファンという人達が居て、アイドルという存在になっていた。

歌には歌詞があつて、私はその歌詞で色々学んだ。

嬉しいことや悲しいこと、人っていうのは色んな感情があつて、溢れ出したり抑えたりして苦しむことだつてある。

ある日、手渡された歌詞で私は自分の気持ちを知ってしまった。

私は『あの人』に恋をしているという事実を。

感情が抑えても抑えても溢れ出てきてしまっていた。

人魚姫のようにただ傍に居られれば良かった。でも、人魚姫と違うのは今の私には声があるということ。

伝えようと決めたその日は金木犀の香る秋晴れの空の下だった。

あのネ・・・

『あの人』と私の間に不自然な静寂が訪れた。

今にも泣き出しそうな顔をしていた私に気付いたのか『あの人』は静寂を破った。

「お前は、もう人間だよ。目でモノを言うようになった。」

目でモノをいう・・・？

「お前はもうワタシの物ではない」

それはつまり『あの人』の者にも、物にも、モノにもなれないという事であり、つまりその、私は私の思いを伝える前に……『あの人』に優しく……振られたのだ。

そしていつものように優しく頭を撫でてくれた。

私が活躍できているのは『あの人』のお陰。

いつも『あの人』は優しく微笑んでくれる。

だから今日も頑張れるんだ。

『あの人』と共に。

そして聞いてくれる、あなたのために。

心の限り歌います。歌い続けます。

一つの色にはなれないこと

分かってる 分かってた

いとおしいあなたの背中

ぎゅつと抱き締めてあげることもしかない

わたしは弱い

駄文失礼いたしました。

勝手ながら「ひとつの色にはなれないこと」 (<http://www.nicovideo.jp/watch/sm18619763>) よるる曲
を参考に書かせていただきました。

素敵な曲に出会ったこと、SSを書く機会を与えていただいたことに感謝しています。

読んでいただきまして有難うございました。